



早稻田學報

大正十年三月十三日 號三十百三第 年十正 大

體育會の根本的刷新

目次

理事 田中 穂積

自然法説の發達に就いて

學説

教授 遊佐 慶夫

校報

高等學院第二部設置認可——高等學院新設運動場に體育に關する建造物設置認可——定時維持員會——教授會——圖書館建築委員囑任及同委員會——體育部長會議——授業終了及試驗施行——試驗成績發表法の改正——科外講義——工手學校卒業式——名譽理事推薦——講師囑任及辭任——工手學校主任交迭——福島慶四郎氏の大學基金寄附——日高教授の英國留學——安部教授及野球團の渡米——大正九年度卒業生追加——贊助會報告——圖書館報告——早稻田大學議義錄改造に關する講師會

校友會報

校友會規則改正委員會——大紫會——第四回吳校友會——上海早稻田會——新潟市校友會——六紫會——大阪市在住四四の會——稻門艇友會——奉天校友會

校友面影

新東京商業會議所議員

森 盛一郎氏

校友動靜

川邊喜三郎氏と著作——中田浩氏より——末高信氏着米——業務異動——轉屏——其他

學生會合

支那協會例會——音樂會

雜錄

庭球コートの新設——高等學院にランニング・トラックの建築——文明協會主催時局研究會——擬國會——雄辯會主催尾崎行雄氏講演會——德永・山本・小林の三博士と大學紀要——德永博士の出發——平沼學長の出張講演——五來教授の地方講演——浮田博士及難波贊助會幹事の歸朝——小室教授の通信——前橋教授の罹災——渡講師嚴父逝去——故川口庶務主任追悼會——溫交會規約改正委員會及改正規約——機械工學部後援會設立趣旨及加入申込芳名

大正九年 本會維持費贈出者氏名報告

東京牛込

早稻田大學校友會

電話番三〇〇五番

東京八九八番 金貯券 座

意見

體育會の根本的刷新

理事 田中穗積

前號の學報に於て讀者諸君に報告した如く、一昨年來着手せる學園改造の事業は幸に豫定の通り總て順調に進行し、大學各學部の根本的革新高等學院第一部及第二部の新設、專門部各科の刷新及商科の新設の如き最近兩三年間學園の面目は全く一新するに至つたが、從來の改造刷新は専ら學術の方面に限られ、教育の重要な半面をなす所の體育會の革新に就ては未だ之れに指を染むる邊がなかつたのである。

尤も學園は從來とても決して體育の獎勵を閉却した譯ではない、現に野球、庭球、其他有ゆる運動競技に於て我が學園の選手が我邦の運動界に覇を爲しつゝあることは、既に業に天下周知の事實であるが、時勢の進歩は中々過去の狀態に甘んずることが出来なかつたのであつて、事情が許すならば百尺竿頭更らに一步を進めて體育會の根本的刷新を斷行したいと云ふことは、兼々痛切に感じ居つた所である。

何となれば我邦が歐米の列強と共に肩を並べて世界の文運に貢獻しようとして居るに當つて、我が同胞の體力が一般白哲人に及ばないと云ふことは實に限りなき遺憾である、最近五十六年來泰西の學術が盛に輸入せられた其結果、今日に於ては我邦學術の進歩も段々先進國に追隨するやうになりつゝあるが、體育の方面に至つては久しい間一般に閉却せられた爲めに、彼我學術の懸隔よりも更に甚しい狀態にあると云ふとは何ともしも黙過し難き所であつて、固有の腦力に於て我が同胞は決して白哲人に對して遜色なきことを確信するが固有の體力に至つては残念ながら多少の遜色あることは之れを承認せざるを得ない、例へば彼我壯士の體重を比較するに、歐洲人の平均體重は十七貫目以上なるに對して、我が邦人の平均體重は十三貫八百目強に過ぎぬ如く、獨り其大きさに於てのみならず又其強さに於ても遜色あることは疑なきに拘はらず、斯の如く劣等なる固有の體力を以てして而かも其改良進歩に努力しなかつたと云ふことは、重大なる心得違ひであつて、國運の健全なる發展の爲めに體育の

獎勵は正さに爛頭魚肩の急務なりと云はざるを得ない。現に此度四ヶ年半の長きに互れる世界大戰に於ても、國民體力の強弱如何は最も重大なる問題となつたのであつて、英國人の如きは夙とに世界の廣ろき最も戶外の運動を愛好する國民と認められ、從て如何なる體烟瘴霧の裡にあつても、英國人の體力は能く之れに耐ゆると認められて居つたのであるが、倅て愈々大戰が破裂して塹壕の裡に長日月櫛風沐雨の辛酸を嘗むるや、追が強健なる英國人の體力を以てしても尙ほ且つ其不充分なるを認め、ロイドジョージの如きは英國人の體力が豫期したるよりも羸弱なりしことを遺憾とし、文部大臣のヘルバート・フイツシャをして計畫せしめた教育改革案に於ても其一大要目として體育の改良を斷行せしめ、又平和克復後の總選舉に臨んでは體力改造の急務を繰返した々々國民に警告して其反省を促せるが如き事實に徴しても思半に過ぐるのであつて、我同胞の體力よりも遙かに優れる英國人の體力を以てして尙ほ且つ此言をなさしむる事實に顧み、吾輩は此點に就て切に國民の猛省を促さざるを得ない。

而して又體育は獨り肉體の圓滿なる發達によつて體力の強健を贏ち得るが爲めのみならず、運動競技は精神修養の上に偉大なる影響を及ぼすものであるから、體育は智育と兩々相並んで教育の重要な半面を形成するものであることは、今更ら絮説の必要もない所である、即ち克己自制、忍耐持久、共同一致、公平無私と云ふが如き美德は皆な運動競技に依つて養成せらるるのであつて、勝敗此一舉にありと云ふが如き場合に於ては如何なる苦痛も如何なる疲勞も飽まで之れを忍ばなければならぬ、又競技の形勢が如何に我れに非なる場合にありても苟くも喪神落膽することなく味方の士氣を鼓舞して頽勢を既倒に回すが爲めにはどこまでも横溢する元氣を維持しなければならぬ、又團體的の競技にありては一絲紊れざる規律節制が最も必要であつて、殊に最近の如く運動競技が科學的に進歩すればするほど、愈々鞏固なる共同一致の精神によつて團結するにあらざれば、到底勝利の榮冠を贏ち得ることが出来なくなつて來た併しながら運動競技に於て最も大切なるもの、即ち運動競技の第一義が何であるかと云へば、夫れは云ふまでもなくフェア・プレー即ち正々堂々の勝負と云ふことであつて、飽までも公平無私に勇らしく正々堂々と立派な態度を以て勝敗を決しなればならぬ、即ち勝利の爲めに手段を選ばぬと云ふが如き卑怯未練の徒は運動競技の逆賊獅子身中の蟲と認む可きものであつて、如何に勝敗の岐る、危機に處しても泰然自若斃れ

て後已む決然たる態度を維持してこそ、初めて運動界の花と謳はるゝのである、換言すれば飽まで正義の味方となり瓦全を馳て玉碎を擇ぶと云ふのが即ち運動競技の眞骨頂であるから、運動競技其のものが精神修養の上に偉大なる効果を及ぼすことは論を俟たざる所であつて、其昔ワテロローの一戦に那破翁の死命を制した鐵公ウエーリントン、嘗てウキングルの宮殿よりエートン校庭に遊戯せる學生を瞰下ろし、ワテロローの戰勝は此運動場に於て得られたりと叫んだと云ふ有名な逸話があるが、世界に於て最も運動競技を愛好するものは英國人であり、而して此英國こそ世界に於ける國民道德の最も進歩せる國柄たる事實を顧るに於ては、體育が教育の重要な半面を形成するの道理は何としても首肯せざるを得ない。

從つて我學園に於ても從來體育の獎勵に努め、殊に近年に於ては著しく其經費を増加し、昨年までは年額約七千圓に過ぎなかつたものを、今年度に於ては一躍五割以上を増額して一萬七百餘圓としたのであるが、而かも之を一萬の學徒に割當つれば一人平均僅かに一圓に止まり、到底體育らしき體育をすることの出来な

い爲めに、或は寄附金を募集し、或は多少の入會金を徴収するが如き窮策に依つて一時其不足を補つたが、斯の如き彌縫策に依つて體育の獎勵を計らんとするが如きは素より望み

なき所であるから、思切つて體育會の根本的刷新を斷行するは正さき當面の急務なりと確信して追々其調査研究を進めつゝ、あつた其際、舊體體育各部の委員諸君は舉つて各部の窮乏を訴へ、之れを救済して體育會の發展を計るが爲めには、斷然體育費を學園の學生全體より徴收して、之れが財源に充てんことを要求するに至つた。

そこで委員諸君をして試みに各部が必要とする最少限度の經費豫定額を提出せしめたが、之れを累計すれば約一萬七千圓となり、更に水陸運動會の如き共通經費を加算すれば、如何に節約するも經常費總額は二萬圓以上に達し、今年度の體育費の丁度二倍以上となるのであつて、此他に尙ほ臨時費として各部の設備の爲めに少からざる經費を要することは又素より論を俟たぬ、從て斯の如く急激なる經費の膨脹に對し學園現時の經濟が到底之れに堪へざることは明かであるから、段々研究の結果此際斷然體育各部委員の要求を容れ、學生全體より體育費年額三圓を徴收し之れを獨立會計として體育會の根本的刷新を計るに決し、新たに制定せる體育會規則に基いて専ら自治的方針を執る考へであるが、此際特に茲に言明して置きたいのは、學園が現に今年度に於て支出した體育費の一萬圓は、將來とても依然體育各部の設備改善の資源として特別會計を

設定し、體育會基金なるものを積立て、將來の大發展に備へる計畫である。

要するに這般の根本的刷新によつて我が學園の體育會は近き將來全く其面目を一新し、我邦の運動競技界に愈々陸離たる光彩を放つに至るべきことを確信するのであるが、終りに臨んで更に一二の婆心を披瀝すれば第一に體育に熱心なるものは、動もすれば之れに没頭し熱中するの餘り學業を怠る懼れがあるが、是れは深く々々慎まなければならぬのであつて、體育各部の發達の爲めには學業優秀なる學生が舉つて皆な其選手となるやうにあらねばならぬ、第二に體育に努めて其結果體力益々旺盛なるに至れば、兎角年少氣銳の學生にあつては元氣に任せて紀律節制を超越せんとする懼があるが、是亦飽まで警戒自重すべしであつて苟くも匹夫の勇を驕るが如き狂態は學生として絶対に之を慎まねばならぬ、而して最後に運動競技の第一義として茲に繰返すことを禁じないのは、フエーア・プレー即ち正々堂々の勝負である、選手自身が飽までも男らしき立派な態度を以て輪贏を争ふべきは勿論、又見物人の立場にあつても苟くも早稲田學園の學生たるを矜とするものにあつては、我が敵手に深厚なる同情を拂ふ紳士たる襟度を忘れてはならぬ、即ち此精神の修養こそ體育獎勵の眞生命であつて、依

て以て退ては學園の教旨に、所謂模範的國民たるを得べく、進んでは人類文化の先驅を爲す大國民として世界の廣居に立つことが出来る譯である。

學 說

自然法説の發達に就いて

教授 遊 佐 慶 夫

法律現象を以つて一個の學問の對象として研究するに至つたのは人文の稍發達したる後であることは疑を容れぬ。精言せば原始未開時代に於ても苟も多少繼續的なる人類共同生活を見るときは之と同時に秩序觀念正義信念の發現せるものと思ふ。即ち茲に法律生活開始の起源を認めなければならぬ。然れども法律とは果して如何なるものであるかに就き、且つ法律生活の人生觀及び世界觀に就き哲學的殊に科學的説明を與へむとする様に成つたのは案外近世のことである。私は此時世を以つて法律の科學的自覺時代として見て居る。此時代は主として第十七、八世紀に於て最も高唱せられた自然法説及び民約論の説明に因つて始めて明かにせらるることを得るものと思ふ。固より自然法説の如きは夙に紀元前に於ても唱へられて居つたことは後にも一言するが如く確かである。然れども現世の法律哲學の基調を創り、又は少くとも之に對して甚大なる影響

を與へたものは確かに十七、八世紀に高唱せられた自然法説であると思ふ。此の自然法説は第十九世紀以來高唱せらるる歴史法説に因つて著しき反動を受け第十九世紀の末葉より今世紀に入つてからは殆んど衰亡に歸したものの様にも取扱はれて居つた。然るに最近の傾向に於ては一種の新自然法的色彩を帯びた學流が著はれて居ることは外來の著書論文に因つて明かである。

自然法説の發達を叙述する前提としては神力説の一般を考察するの必要がある。抑も法律と謂ふものの概念を得るが爲めに、古來神の力に其根據を求むるの説明が行はれた事が多い。此派の説を爲す者の中にも其説述の方法には種々ある。アウグスチヌス(Augustinus, 354-430)は所謂神政論(Theocracy)を主唱して元來人類は神定法(Lex divina)に依つて支配せらるべきものであつて人定法(Lex humana)に依つて支配せ

らるるのは畢竟神國完成に至る迄の假現手段に過ぎぬから理想としては人定法は消滅すべきものであると論じた。此説は古代に於けるギリシア及びローマの法學者の一派を代表するの論であつた。此説に據る時は眞正なる法は神が定む可きものであるから人定法に誤謬があらば之を訂正すべく、且つ人定法の設定は苟も忽にす可きものでないと云ふ警告を與ふるの特徵あることは明かである。

而して此説の理想たる可き人定法廢止の結果は人為的強制統治權を否定するともなり一種の無政府主義を實現することになる。更に後世に至りアキナス(Aquinas, 1228-1274)の如きは萬有は神意に依りて支配せらるるものであると論じ、法の羈束力の根據を神の力に求めて説明した。更に近世に至りてはスタール(Stall, 1802-1861)の如きは人定法は間接に神意の表現したものであると解した。此等の神力説の根柢は説明語としては神力又は神意などと稱ふるも思想の根柢には自然力と云ふものに因つて法の羈束力を説かむとするものがある。この見様に因つては此説は一種の自然法説として取扱ふことが出来る。

神力説の思想は單に學説の方面に現はれたのみでなく、法典の上にも古代より屢現はれて居る。例へば紀元前二二五〇年頃のバビロンのハムラビイ法典の如きは此法典は神より授けられたるものであると明示せられ

又た紀元前約二千年頃の法典なりと信ぜらるる インドのマナーの法典、モゼスの法典の如きも神より授けられたるものと宣示せられたることは學究上立證せらるる所である。支那に於ても神人法を黃帝に授けたりと謂ふ傳説がある。其他エジプト、アラビア、ペルシア、ローマ、ギリシア等に於ても此種の傳説少くはない。又た古代に於ける裁判は帝王、酋長又は族長の如き者が神意を承けて是非曲直を決裁するものであると説明せられた様である。中世紀に於てもヨーロッパではキリスト教が法律に影響し法律の研究は多く、宗教家の手に移り法律、國家、統治權等の觀念は悉く神力を基礎として説明せられた。彼の神授君權説の如き亦た之に屬する。

以上述ぶるが如く法の成立及び效力の本源を神の力に歸するは社會組織と社會人心の發達の幼稚なる時代に於ては爲政者の執る可き手段又は口實であつたかも知れぬ。又だ或は爲政者自身に於ても斯くの如き信念を持つて居つたかも知れぬ。神の力に根據を求めて法の觀念を定めむとする者は先づ神の意及び存在を證明するの責任がある。或は神とは全智、全能、最高究極のものであつて吾人の理想上の假設なりとし、吾人の智能と地位に於ては到底究明することの出来ぬものを神の力に歸し、吾人は只だ神の力を信ずるものであ

ると説くかも知れぬ。私は茲に神の意義及び存在に就き論究するものには無い。吾人は法の觀念を科學の對象たらしめ、之を神の力に歸して信界に投ずることには賛成出来ぬ。固より吾人の知界は尙ほ未だ幼稚であつて科學的研究に依つて其範圍の擴大を計らなければならぬし……假りに其範圍は極度に擴大するとも總ての人生の事象を知界に取容れることを得るものとは信ぜぬが、少くとも法の觀念は之を神の力(信界)に投ぜずして社會力に歸するに依て之を知界に置かむとするものである。故に神力説よりは遙かに哲學的且つ科學的に發達せる自然法説の方が高唱せられたのも偶然では無い。

所謂自然法説なるものは人類の自然狀態を以つて立論の根據となし、時と處とに従つて變はらぬ、普通の法則を以つて自然法(Lex Naturalis)と爲し、之を以つて眞正の法なりと解するのである。従つて或時代の或場所に對する人定法の如きは假現法に過ぎずして本體法に非らずと爲し、法律學の本領は此自然法の發見に在りと爲すのである。此意味に於ける自然法の觀念は古代よりも在つた。プラトン(Platon, 429-348 B. C.)及びアリストテレス(Aristoteles, 384-320 B. C.)の如きも類似的の説を唱へたのであつた。又たローマ法に於ても一種の自然法説はあつたが主として中世紀に興つたものである。就

中十七、八世紀は自然法説の全盛時代であつた。其一般を示さむには、イダリーのマキアヴェリ(Machiavelli, 1469-1527)が嘗て現在の國家及び國家法制を以て理想のものに非らずと爲し、其本體を實現しなればならぬと論じたのは自然法説に似たる所がある。降てオランダのグロチウス(Hugo Grotius, 1583-1645)に因て最も有力なる自然法説が主張せられた。彼は寧ろ國際法創始の見地より各國の現實法を離れて共通不變の自然法を主張したのである。自然法の基礎を人類の天性に求め人類は天性として社交性(Amicitia societas)を有するものであるから、各人の互讓約束に依て國家狀態を惹起するものであると論じ、自然法説と同じ時に民約説をも主張したのである。而して其自然法論と民約論とを調和する爲めには自然法は各人の互讓約束を遵守することを要求する旨を説いて居る。

イギリスに於てはホブズ(Hobbes, 1588-1679)が同じく人類の自然狀態と社會約束とを基礎とする法律觀を主唱して居る。然れども其説く所は前掲グロチウスの所説とは前提に於ても結論に於ても著しく相違して居る。即ち彼はグ氏の説の前提である人類の社交性を否認して却て人類の利己性を前提とし各人は其利己性を實現するが爲めに争闘が絶えぬから、此争闘狀態(Status belli)を避

けて治安狀態(Status pacis)を求むるが爲め各人の約束に依て其自由を抛棄し國家主權に絶対服従するものであると論じ結論に於て專制君主制を謳歌したのである。従て自然論民約論の提唱者たる彼が專制君主制を謳歌するが如きは矛盾したる思想家であると云ふ非難を受けたことは屢あつた。

前掲對立せるグロチウスの社交性論とホブズの利己性論との影響を受けて茲にブーフエンドルフ(Bonnet von Pufendorf, 1632-1694)の折衷的自然法論が現はれた。即ち彼は人性を解して利己自愛性と社交他愛性とに分析して團體生活は自己及び他人に對する義務であると論じて法の觀念を定むるの基礎とした。併せて彼は民約論を主張して國家の權力は絶対專制的のものに非らずと説いた。

民約論の要旨は法を解して人類の自由意思の合致に因つて成立するものとして居る。例へば民約論の主唱者とも謂はれて居るフランスのルーソー(Jean Jacques Rousseau, 1712-1778)は一七五三年「人類不平等起源論」(Discours sur l'origine de l'inegalité des hommes)を著して、人の身體的不平等は自然の定る所であるが其政治的不平等は民約に基くものであると論じた。更に一七六二年「社會契約論」(Du contrat social)を著し吾人は元來自由平等である可きだが、各人の社會契約に因りて自己の權利又は自由を共同團體に讓渡し、之に對して共同團體より同量の權利又は自由を取得するものであるから結局各人は毫も失ふ所がない筈であり、而して此權利又は自由は共同團體の力に依りて保護せらるるもので

此人類の經驗感覺論と人類の自由平等を前提とする民約論を主張せるロック(John Locke, 1632-1704)の如き、法を以つて自然の必然的産物とし人爲法の上に人性の正義に基く法ありと主張せるモンテスキュー(Montesquieu 1689-1755)の如き、又自由に依りて法の觀念を説かむとするカント(Immanuel Kant, 1724-1804)の如き皆論旨多少の相違はあるが一種の自然法論者である。其他ライブニッツ、ウォルフ、フィヒテ、ケーゲル、スタール、アーレンス等

あると論じて居る。如斯社會契約に依りて茲に契約者たる多數人の總意 (Volonté générale) なるものを生じ、法律は實に此總意の表示に過ぎぬ、又た此總意は之を成態として見るときは國家であつて、作用として見るときは統治權となるものであると説いて居る。ルソーは民約論の創始者ではない。前に掲げた自然法論者は皆な同時に民約論者であつた。唯だ民約論は後に至つて旺盛の極に達し、遂に之がフランス革命の思想上の原動力とも成つたのである。

ルソーと相並んで民約論を唱へたのはドイツのカント (Immanuel Kant, 1724-1804) である。彼は個人の意思の絶対自由なることを前提として人民は原約を締結して無正義状態にある自然的自由を抛棄し正義状態にある法的自由を獲得するものであると説き、國家及び法律の基礎を個人的意思に歸して説明を與へたのである (Kant, Metaphysische Anfangsgründe der Rechtslehre, 1797)。

ルソーは民約の事實を想像的に説明して居るも、カントは民約の存在を観念的若しくは理想的に説明して居る點は兩者の間に餘程の距離がある。

フランスのボーシール (Emile Beaussire, 1824-1889) の社會契約は社會の成立を説明しないで、社會の存在を説明した。而して其契約は常に時代の黙約であると論じ、從つて契

約當事者は社會の推移に依りて變動ある可きことを主張した (Beaussire, Les principes du droit, 1888)。

ドイツのフイヒテ (Johann Gottlieb Fichte, 1762-1814) の如きも之と類似の説を爲し國家を以つて一の發達物と解した。

自然法説は其立論の前提に自然狀態と云ふ空想的獨斷を置くものであつて畢竟科學的根據の薄弱なるものとして其後ドイツに勃興せる歴史法學派から非常な反對を受けた。精言せば歴史法學は十七、八世紀に於てフランスに旺盛であつた自然法學の反動として主としてドイツに起つたものである。即ち法は歴史的に國民思想に適合して發達するものであるから或時代に於ける或國民の總意夫れ自體が法であると解した。換言せば時と處とに適應する相對的眞理を説いて、自然法説の如く時及處に從つて易らぬ絕對的普遍的眞理を高唱する自然法説に對抗したのである。

前世紀の初、歴史法學の勃興以來自然法學の勢力は甚だ衰へた。然れども中世紀に於ては自然法説は歐洲一般の思想界の潮流に投合し宗教改革及び文藝復興の機運に乗じて各般の束縛を撤廢すること個人主義の發達とを助勢した。又た、思ふに自然狀態論及び民約論を基礎とする自然法説が政治上に偉大なる影響を及ぼしたことも歴史不明かな所である。即ちロックの民約論は米國獨立の思

想上の原因を爲し、ルソーの民約論がフランス革命の思想上の原因を爲した。又た法學史上に於ては自然法説は彼の法及び國家の觀念を與ふるに就き神りに基礎を求めむとするが如き思想を排して科學的研究の機運に導き、更に過去及び現在に於ける法律と國家を超越して高遠なる理想を説きて法律及び國家刷新の刺戟を與へた。自然法説は法の本質を人類の性情に歸して説明せむとするものであつて現代の法律と雖も自然法的觀察を以つて説明することの出来るものは決して少くないと思ふ。

自然法説は理想の高遠なる丈けに立法者に對して立法の正確ならむことに就き警告を與ふる點に於ては有力なる學説として迎へなければならぬ故に自然法論を以つて法の本質を説かむとする學者はフランス等に於ては今日尙ほ少くないのである。殊に近來は時と處とに依つて易り得可き相對的眞理を以つて法の本質なりと解する新自然法とも見る可き學説あり、又た或は比較法學の勃興と共に世界共通法の理論も著はれ其運動も起つて居る所から見れば (拙稿、早稻田叢誌貳號登載「佛蘭西民法の發達に就いて」) 今日に於ても自然法説の影響は案外著大なるものがある。更に一方に於ては近時世界戰爭の思想界に於ける副産物として高唱せられて居る無政府主義等の國家、社會の改造論の如きは法律觀としては自然

法説の一流とも考へることが出来る。此他文學的、哲學的、政治的、社會的に自然法説と共鳴する各般の思想系統に就き研究することは興味ある問題ではあるが紙面の都合上此稿に於ては之を許さぬから後日を期することにする (一〇、一一、一二)。

法説の一流とも考へることが出来る。此他文學的、哲學的、政治的、社會的に自然法説と共鳴する各般の思想系統に就き研究することは興味ある問題ではあるが紙面の都合上此稿に於ては之を許さぬから後日を期することにする (一〇、一一、一二)。

て委員の報告あり、尙其他數件につき協議す。

△文學部教員會
二月二十六日午後一時より會議室に於て文學部教員協議會を開き、次學年度學科配當に關する件及試験方法に關する件其他につき協議せり

△商學部教授會
二月二十八日午後三時より商學部教授會を開き、次學年の學科課程に關する件及試験方法に關する件等につき協議す。

◎體育部長會議
二月二十六日午後一時より體育部長會議を開く。平沼學長、田中理事及中島、氏家、小林、北澤、高杉、山本、安部の各部長出席、學長より提出せられたる體育に關する規程案に就きて討議せり。

◎圖書館建築委員囑任
御大典紀念事業の一なる本大學附屬圖書館の建築工事は、愈來る九月より着手する都合なるを以つて、二月一日左記諸氏に對し該建築委員を

●高等學院第二部設置認可
かねて此筋へ申請中なりし高等學院第二部設置の件は、二月七日認可の指令を受けた。

●高等學院新設運動場
に體育に關する建造物設置の件認可
かねて高等學院の運動場に體育に關する建造物設置の件につき陸軍省に申請中のところ、二月廿四日認可せられたり。

◎定時維持員會
二月八日午後四時より定時維持員會を開く。當日の出席者は
大隈會長。澁澤子。高田。市島。渡邊。増田。金子。中島。浦邊。平沼。淺野。松平伯。鹽澤。田中。

△理工學部教授會
二月一日午後一時より理工學部教授會を開き、聽講生規程に關する件及び試験成績發表に關する件につき

●高等學院第二部設置認可
かねて此筋へ申請中なりし高等學院第二部設置の件は、二月七日認可の指令を受けた。

●高等學院新設運動場
に體育に關する建造物設置の件認可
かねて高等學院の運動場に體育に關する建造物設置の件につき陸軍省に申請中のところ、二月廿四日認可せられたり。

◎定時維持員會
二月八日午後四時より定時維持員會を開く。當日の出席者は
大隈會長。澁澤子。高田。市島。渡邊。増田。金子。中島。浦邊。平沼。淺野。松平伯。鹽澤。田中。

△理工學部教授會
二月一日午後一時より理工學部教授會を開き、聽講生規程に關する件及び試験成績發表に關する件につき

校 報

て委員の報告あり、尙其他數件につき協議す。

△文學部教員會
二月二十六日午後一時より會議室に於て文學部教員協議會を開き、次學年度學科配當に關する件及試験方法に關する件其他につき協議せり

△商學部教授會
二月二十八日午後三時より商學部教授會を開き、次學年の學科課程に關する件及試験方法に關する件等につき協議す。

◎體育部長會議
二月二十六日午後一時より體育部長會議を開く。平沼學長、田中理事及中島、氏家、小林、北澤、高杉、山本、安部の各部長出席、學長より提出せられたる體育に關する規程案に就きて討議せり。

◎圖書館建築委員囑任
御大典紀念事業の一なる本大學附屬圖書館の建築工事は、愈來る九月より着手する都合なるを以つて、二月一日左記諸氏に對し該建築委員を

囑任す。

圖書館建築委員

- 市島謙 吉氏
- 鹽澤昌 貞氏
- 田中穂 積氏
- 安部磯 雄氏
- 佐藤功 一氏
- 内藤多 仲氏
- 前田多 藏氏
- 小林堅 三氏
- 金田恭 介氏

二月十六日午後二時より圖書館建築委員會を開く。阿部、佐藤兩委員を除くの外全委員出席、内藤委員の設計に關する詳細なる説明及各委員との間に種々質問應答あり。五時閉會。

●授業終了及試験施行

- △大學部各部第一、二學年—三月三日授業終了、三月七日より同十五日まで試験施行
- △專門部第三學年—三月三十一日授業終了、四月八日より同十四日まで試験施行
- △高等師範部—三月五日授業終了、三月十四日より同十九日まで試験施行
- △高等豫科—二月二十六日授業終了、三月一日より同十一日まで試験施行
- △高等學院—三月十一日授業終了、同十四日より十六日まで試験施行
- △理工學部—三月十二日授業終了、同十六日より同二十二日まで

試験施行

●進級試験成績發表表

法の改正

進級試験成績は、從來一括して掲示場に掲載したりしも、今後之を改め、各個人別に夫々其の宿所に宛通知すること、せり。従つて學生は其の宿所に變動を生じたる場合には直に其の旨届け出てらるべし。

●科外講義

△二月一日、三日の二回に互り、法學博士添川壽一氏を聘し大學部商學部第一學年に對する科外講義を開く。講演題は「世界經濟の變動」なりき。△二月十日午後三時よりバスキール民族觀光團の一行を迎へて科外講義を開く。先づ鹽澤博士の一行紹介あり、陸軍大學教授長瀨鳳輔氏のバスキール民族の國情及歴史等に關する説明に次いで、團長クルバンガリエフ氏は、バスキール民族の事情、回教民族の統一より、進んで亞細亞民族聯盟の希望を述べ、それに對する日本有識者の指導後援を乞ふ旨を述べて降壇、夫れより一行中の回教僧侶の談話あり。終りて鹽澤博士の謝辭を以つて閉會を告ぐ。講演後茶菓を饗し、尙懇談を重ねて袂を別ちたりしが、十五日團長ク氏鹽澤博士を訪ひ、曩日の厚意を感謝して辭去せりといふ。

●工手學校第十七回卒業證書授與式

二月十三日午後一時より第十七回卒業證書授與式を舉行す。定刻片山主事開式を宣し、徳永校長卒業生二百七十四名に卒業證書を、各科優等卒業生に大隈侯爵夫人寄贈の賞品を又各料特待生に特待證書を授與し、續いて報告及訓示あり。次に平沼學長、高田名譽學長及來賓桑木文學博士の演説あり。終りに在校生總代安達英雄の祝辭及び卒業生總代大西良久の答辭を以て式を閉つ。各科卒業生受賞者及特待生の氏名左の如し。

機械科

廣澤 定二(茨城) 戶部 利吉(宮城)	三村 德藏(岡山) 小松 勇(東京)	村松 英策(東京) 龜井伊勢松(神奈川)	小林 三郎(石川) 小野 俊祐(山口)	佐藤 弘石(川) 田中 市助(福岡)	星 松太郎(栃木) 田丸 督郎(千葉)	高垣 熊市(廣島) 村田久一郎(北海道)	金杉福太郎(東京) 太田 續(愛知)	伊藤 駒雄(長崎) 中井 敏男(兵庫)	高荷 明治(埼玉) 長島 恒雄(茨城)	島崎 清長(野) 伊藤 好清(千葉)	中野 茂千(葉) 中山 要(埼玉)	雨宮 利啓(東京) 三田 要(静岡)	稻葉 清一(東京) 木村 猷市(静岡)	川上 好雄(石川) 佐久間勇象(群馬)	富田 素忠(茨城) 松田政太郎(福井)	鈴木 武治(宮城) 本間 正男(北海道)	大崎 一郎(東京) 島本吉三郎(北海道)	北島荒太郎(佐賀) 小山 長作(岩手)	渡邊 清(埼玉) 玉綱島 和(北海道)	鈴木 貞治(埼玉) 坂口規矩司(鹿児島)	水野 文雄(新潟) 清野 定治(新潟)														
長坂 昌雄(北海道) 鎌田 芳雄(千葉)	大和利八郎(福岡) 銀本 太六(千葉)	梶島 寅吉(兵庫) 濱 隆三(兵庫)	山本 策一(岡山) 中島 九市(佐賀)	小野澤嘉市(神奈川) 直井 傳吉(栃木)	濃沼桂太郎(東京) 松下和四郎(北海道)	里見 孝山(梨) 河野 伊八(福岡)	和田己之吉(茨城) 佐藤久四郎(宮城)	木村 勝造(茨城) 赤根謙次郎(茨城)	平石 一雄(廣島) 佐藤 源助(福島)	林 利一(京都) 渡邊 嘉一(廣島)	長谷川玉吉(群馬) 村上 十吉(岩手)	香川 伸正(香川) 末藏(廣島)	土屋 義隆(東京) 井田福太郎(群馬)	辻 生一(廣島) 島本 春平(新潟)	渡邊秀太郎(栃木) 中村 巖(青森)	川島 信吉(東京) 高木 一(佐賀)	日高 弘(福岡) 藤田 長年(新潟)	笠島 眞大(分) 高中榮太郎(東京)	鈴木徳次郎(東京) 京古川 長治(千葉)	鳥羽政太郎(東京) 京高須實三郎(東京)	松澤 直一(千葉) 奥野 助一(大阪)	上松 茂(山形) 杉本 和雄(滋賀)	栗屋 豐(東京) 大場無事也(東京)	横川 勇三(東京) 川井 喜一(富山)	野山 登(岡山) 高橋 次作(熊本)	佃 安好(石川) 後藤 清令(埼玉)	原島菊美郎(神奈川) 根本 龜吉(千葉)	荒井 鑑一(東京) 大平 清一(三重)	阿藤 悠(廣島) 布施 秀藏(北海道)	田中 悌三(東京) 森山 英光(福島)	西村 忠治(秋田) 小野長三郎(福岡)	白石 信一(茨城) (百十一名)	大西 良久(石川) 森崎 小平(兵庫)		
渡邊 四郎(東京) 京 萱島 滿(大分)	松野 繁友(東京) 荒木藤太郎(京都)	飯塚 民雄(千葉) 山際壽一(廣島)	松澤 正男(東京) 横山 茂雄(岐阜)	島崎彌之助(東京) 田澤 清吉(青森)	河合徳太郎(東京) 公平 雄助(山形)	勝村 正(東京) 漢那 長者(沖繩)	國安 光久(秋田) 長瀬 光也(福島)	大村 寛(山梨) 石川利一郎(栃木)	吉田 義夫(東京) 古澤鶴太郎(東京)	石井直次郎(埼玉) 柏木 正巳(福岡)	福岡 良章(徳島) 鈴木 武雄(福島)	土屋久四郎(埼玉) 川名 潤(東京)	有吉 賢一(福岡) 田中貞一郎(埼玉)	西幸田一美(福岡) 田島 九二(長野)	佐藤 義雄(福岡) 石井勤一郎(静岡)	栗屋 正雄(山口) 土山 康二(石川)	草野 秋美(福島) 白波瀬健次郎(京都)	加々宮頼胤(神奈川) 佐久間權次郎(埼玉)	伊藤 太郎(石川) 荻原 幸祐(山梨)	西村 顯二(東京) 佐藤 清治(新潟)	長島 龍雄(神奈川) 澤村勝次郎(鹿児島)	永井 松(茨城) 和田 修三(千葉)	齋藤 保敏(長野) 渡邊 正男(岐阜)	城戸 潤次(福岡) 古賀雄次郎(佐賀)	坂本 真一(廣島) 關 一男(長野)	秋山 貢(新潟) 柏木 誠二(福島)	栗山 參藏(東京) 赤塚 秀雄(長野)	森山 吟二(佐賀) 井波 明節(茨城)	三井 真三(富山) 尾口 一二(岐阜)	小原 榮祐(岩手) 岸 秀彦(茨城)	太田宗治郎(宮城) 瀧本 惣松(福島)	水落 純士(山口) 遠藤宇兵衛(福島)	松田 貞平(岐阜) 布川 千尋(福井)	池住美鶴男(三重) 塚原 幸市(福岡)	渡邊 勝夫(栃木) 桐原知四郎(熊本)

照井喜代吉(秋田)野武一郎(山梨) 山之上 巖(宮崎)山本 幸平(富山) (七十八名)

採鑛冶金科

城戸年之助(富山)窪田 浩廣(山梨) 柏崎 竹二(栃木)津脇 啓一(山口) 花田 清(福岡)山崎 信一(福岡) 稻束 武男(東京)鈴木 榮一(静岡) 小町 太郎(東京)京比佐 直永(福岡) 五十嵐義雄(福岡)吉村 紀一(福岡) 古川幸太郎(福岡)白石 公任(福岡) 戸祭亥之助(茨城)陳 火塗(臺灣) 阿部 廣秋(田)千葉喜代吉(秋田) 中本 猛雄(廣島)山本 與助(秋田) 山口 一(佐賀)賀 竹尾 晋(茨城) 高比良貴一(長崎)阿部 靜造(岩手) 小林 荒兵 庫 白石三佐雄(福岡) 酒井 清哉(福岡)松尾 廣治(青森) 八卷長三郎(宮城)熊田 元治(福岡) 伊勢 清藏(秋田)齋藤 正平(茨城) 岡崎 文吉(静岡)大澤 克己(神奈川) (三十四名)

建築科

福島 賢治(富山)巨勢 利雄(東京) 薄井 金治(石川)中西 義雄(東京) 久保園重(鹿兒島)北岡 俊次(奈良) 淺井 次作(石川)貝川 信次(東京) 原田 留吉(東京)柴田 幸助(山形) 本澤 幸男(茨城)佐藤巳之助(静岡) 天野 景遠(長崎)三浦 昇愛(知) 本郷 忠夫(宮城)深澤 豊造(山梨) 町田榮太郎(東京)山本 眞一(東京) 大貫伊勢松(神奈川)小島 繁治(大阪) 柏原丑五郎(東京)花房 清美(山口) 小島芳太郎(東京)田所 利治(茨城) 鹿野安次郎(山形)草野 茂一(福島)

岡庭市太郎(東京) (二十七名)

土木科

森瀨喜三郎(長野)鹿熊 要作(長野) 佐藤 悟(山形)瀧本達四郎(福島) 岡野 信之(島根)石塚 豊成(新潟) 上遠野武雄(神奈川)仲 信一(北海道) 福田繁治(滋賀)牧野 文藏(岡山) 鈴木 春次(福岡)西尾 守次(福岡) 荒井庄三郎(茨城)星野津三郎(新潟) 木村 清作(石川)藤田竹次郎(富山) 正十嵐吉美(福岡)久保田甚平(新潟) 大久保 孝(千葉)今井 英一(岡山) 長井 博(栃木)加賀美清丸(山梨) 小橋 丑松(茨城)赤井與四郎(東京) (二十四名)

各卒業生ニシテ大隈侯爵夫人ヨリ賞品ヲ受ケタル者

(計貳百七拾四名) 機械科 廣澤 定一 電工科 大西 良久 探鑛冶金科 城戸年之助 建築科 福島 賢治 土木科 森瀨喜三郎 待生 第一學期 淺野 靜夫 第二學期 岡 丹治 第三學期 田中 藤吉 機械科第四學期 坪内 正次 電工科第四學期 安達 英雄 探鑛冶金科第四學期 坂田 勇 建築科第四學期 東 常吉 土木科第四學期 濱本多喜男

名譽理事推薦

大正八年三月維持員會に於て前理

事田中唯一郎氏を名譽理事に推薦せしを固辭して受けざりしが、本年二月八日の維持會に於て又改めて氏を名譽理事に推薦し、同氏の受諾を得たり。

講師囑任及辭任

陸軍歩兵中佐 平 尙明氏 右高等學院講師囑任 講師 上村 眞澄氏 右講師辭任

工手學校主任交迭

二月一日より附屬工手學校學科主任に交迭ありき。新主任は左の如し。

機械科主任 沖 巖氏 電工科主任 山本 忠興氏 探鑛冶金科主任 能村 千別氏 建築科主任 佐藤 功一氏 土木科主任 秋田 重季氏 豫科主任 氏家 謙曹氏 同 野田 昇平氏 同 木村 三郎氏 同 藤本 慶祐氏 同 立川 長宏氏

福島慶四郎氏の大學基金の寄附

佐賀縣多額納稅者 福島慶四郎氏は大隈侯爵の手を經、本大學基金として金壹千圓を寄附せられたり。

日高教授の英國留學

英文學研究の爲め本大學より留學を命ぜられたる教授日高只一氏は、三月廿五日英國に向け出發の豫定。

安部磯雄氏及野球場

の渡米

我が野球場は市俄古大學野球場の招きに應じ、安部部長、飛田監督以下十四名、來る三月廿六日コレヤ丸に渡米の途に著く筈なり。

大正九年度卒業生追加

左記二名は卒業延期のところ去る十二月二十四日付を以つて卒業せり 電氣工學科 菊池 武(茨城) 探鑛冶金學科 竹内 正榮(福井)

贊助會規則

第一章 總則

第一條 本會ハ早稻田大學贊助會ト稱ス 第二條 本會ハ早稻田大學經常費ノ補充ヲ計ルヲ目的トス 第三條 本會ハ本部ヲ早稻田大學内ニ置ク

第二章 會員

第四條 男女ヲ問ハズ本會ノ趣旨ヲ賛成シ一定ノ出金額ヲ齎スル者ヲ本會々員トス 第五條 本會ノ齎金ハ毎年拾貳圓ヅツ十ヶ年拂込ヲ以テ一口ト定ム 第六條 會員ハ一人ニテ齎金幾口ニテモ引受クルコトヲ得

第三章 委員會、委員及幹事

第七條 本會ノ會務ヲ統理スルガ爲メ委員長一名ヲ置キ早稻田

大學理事ヲ以テ之ニ充ツ 本會ノ事務ヲ補翼スルガ爲メニ委員若干ヲ置ク

第九條 委員ハ早稻田大學總長及學長之ヲ囑託シ其任期ヲ三ヶ年トス

第十條 本會ハ會員募集事務ニ當ラシムルガ爲メ本部ニ幹事及主事ヲ置ク

第四章 會計

第十一條 本會ノ資金ハ早稻田大學基金管理委員之ヲ管理ス 第十二條 本會ハ早稻田大學會計監督之ヲ檢査ス 第十三條 本會ノ會計ハ早稻田大學學報ニ依リ之ヲ報告ス

拂込の時期毎年一回(御指定の月)又は二回(例へば七月又十二月)とするも差支無之御指定に従ふものとす 拂込の方法 本會の原則としては集金郵便の方法に據るも御指定あらば振替貯金又は其他の方法にても差支無之ものとす

贊助會報告

贊助會申込氏名 (第十九回)

一、一口 神奈川 淺野謙次郎殿 一、一口 愛知 山地 保殿

●附シタルハ校友ニ非ズシテ特許同セラルレタル諸氏ナリ

Table with columns for names (e.g., 村上晃英殿, 酒井英一殿) and locations (e.g., 東京, 茨城, 東京城). It lists various individuals and their affiliations.

Table with columns for names (e.g., 大坂拓殖, 東京柏村) and locations (e.g., 大坂, 東京, 秋田). It lists individuals and their affiliations.

正誤
第十八回(一月號)報告には誤謬あり
しを以て左の如く訂正仕候
◎光江達郎殿とあるは
◎折井行江殿とあるは
◎兩角哲郎殿とあるは

圖書館報告
本館一月分閱覽統計左の如し
開館日數二十七日
種別 人員 冊數
學生貸出 九、三六 一、五七二
特別貸出 三三 六六
館外貸出 二〇七 四〇〇
公衆貸出 四〇〇 七六三

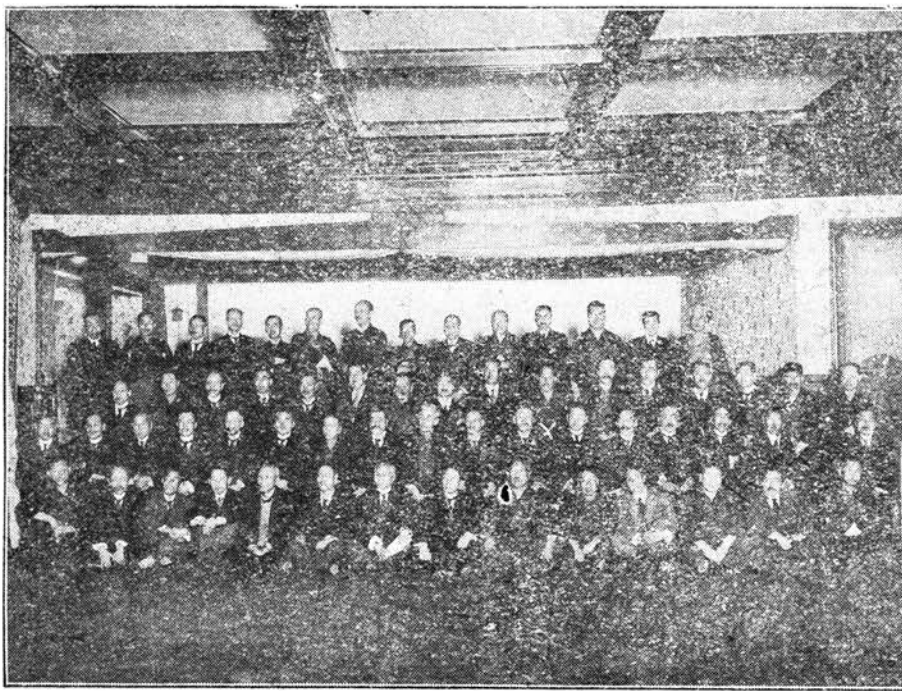
圖書新加月報
本館一月分新加圖書は總計二百二十部七百七十八冊にして内洋書六十一部八十冊和漢書百五十九部六百九十八冊なり其細別左の如し。
大正十年一月分洋書新加統計表

Table with columns for department codes (A, B, C, D, E, F, G, H, I, J, K, L, M, N, P, Q, R, T, U, Z) and counts. It shows the distribution of books across various departments.

Table with columns for book titles (e.g., 波宗教, 仁心學) and counts. It lists specific books and their quantities.

本大學講義錄改造に關する講師會
本大學出版刊行の各科講義錄は、實に明治十九年の創刊に係り、日本通信教授の鼻祖として本大學校外教育の一大機關たり。同講義錄は、新

學年の開始毎に其内容組織に改善を加ふるを怠らざりしが、今回世界大戰後に於ける政治上社會上思想上乃至實業上各般の變遷に伴ひ、今年度より向ふ數年間の繼續事業として根



早稲田大學會 義錄關係師會

本的改造を行ひ、之をして時代に順應せしむべき計畫を立て、之れが協講打合せを兼ね、正月三十日(日)午後五時、麹町九段坂上富士見軒に於て、講義録關係の講師招待會を催せ

高田 早苗 平沼 淑郎 市島 謙吉

り。種々改造上の協議を凝せる後食卓に就き、デザートコースに入るや出版部長たる高田名譽議長起つて一場の挨拶をなし、政治經濟科及法律科講義録に行政法講義を擔任せる行

政裁判所評定官島村他三郎氏講師側を代表しての答辭あり、紀念撮影の後十時散會せり。參會者氏名左の如し。

今同母校の海外留學生として渡米せらるゝ同窓校友末高信氏の送別を兼ねて、一月十五日大柴會(大正四年度商科出身在京濱同窓會)を赤坂の「もみぢ」に於て開催せり。本會の春季會には時期尚ほ早く且つ突然の開

大正十年一月廿九日午後六時より新年宴會を日本人俱樂部に開く。昨春來財界反動の結果夙に會員に異動

校友會報

- | | |
|-------------------|-------------------|
| 中村 進午 岡 實 島村他三郎 | 岡田 正美 西村 眞次 本多淺治郎 |
| 清水 孝藏 田中 禮積 吉田 靜致 | 矢津 昌永 糸 左近 池田 清 |
| 長瀬 鳳輔 中島半次郎 桑木 殿翼 | 原田 儀作 山口 大藏 熊谷 主膳 |
| 金子 馬治 兒島獻吉郎 林 泰輔 | 土屋 詮教 日高 只一 會津 八一 |
| 松平 康國 千秋 季隆 松井 簡治 | 山口 剛 中山 正男 依田信太郎 |
| 森岡 常藏 谷津 直秀 脇水鐵五郎 | 松宮 三郎 勝田 一 前田定之介 |
| 増子喜一郎 高野 復一 野島常次郎 | 上野 陽一 種村 宗八 青柳 篤恒 |
| 吉田 眞三 五來 欣造 高橋 清吾 | 小久江成一 山本利喜雄 山田太一郎 |
| 服部文四郎 小林 行昌 北澤新次郎 | 石丸秀次郎 石野 元藏 伊藤 輔利 |
| 煙山專太郎 中村 萬吉 杉森孝次郎 | 市野彌三郎 望月 世教 塚越 菊治 |
| 本間 久雄 永井 一孝 五十嵐 力 | 山本眞太郎 |

校友會規則改正調査委員會

二月廿四日午後六時より、永樂俱樂部に於て規則改正調査委員會を開き、改正草案につきて逐條審議を遂げ、九時散會せり。

當日の出席者は左の如し。

- 平沼 會長 石橋 浩山
星野 治作 田中 禮積
名取 夏司 山田 末吉
増田 義一 前田 多藏
崎山刀太郎 森 盛一郎
鈴木佐平次

大柴會

會なりし爲めか、種々の事故者多く多數の來會者を得ざりしは遺憾なりしが、同窓會員の芽出度き新春の會合とて、打寛ぎで且つ談し且つ酌み、十二分の歡を盡し、末高君の成功を祈りつ、十一時和氣霧々裡に解散す當日の出席者は左の如し。

- 岩村伊三郎 久能木誠一
木村 福藏 萬年虎喜智
山田 丑藏 人見 修藏
末高 信 森矢 懿譽
(順序不同)

第四回吳校友會

壹月十六日午後六時より、在吳校友及早稲田學園に關係ありたる者の集りが中通り五丁目の新野田樓上に催された。最初は有名の新年限會と云ふことであつたのが、意外に一同が氣乗りがして來たので、改めて校友會と云ふ事にした。會長佐々木代

上海早稲田會

宇田川光七 石田常太郎

- 播磨徳太郎 木戸 愛三 岩本 正生
山中 金吾 山本 五郎 森 華藏
岡村 順一 仁瓶 武雄 河野 俊雄
佐々木千秀 服部松太郎 溝部 浩
池田 廣治 田口 定男 安原 成音
宇高 信一 石田 昌生 野木 六郎
松尾 次郎 羽木 眞雄 朝日 善
宇田川光七 石田常太郎

二十三名。(宇高生報)

諸士は親戚に御不幸があり且議會開會間近の忙しい中を都合をして御列席下され、「社交に就て」と云ふお話があり、又多額の寄贈金をもせられたので素敵に面白い會合となつた。從來の幹事たる吉田正良君が病床に居られるのを見難ふ事を中合せ、新らしく工廠側から羽木眞雄君を、又商人側から野木六郎君を幹事に加へることにした。又事務所を取り敢へず吳市三番町一の六次一三、大和商會に置くことを右商會主たる野木君の御承諾の有無に拘らず決めて懸ては俱樂部のやうなものを作りたくと云ふことにした。會則等の起草草端のことは四人の幹事一任といふことに満場一致で可決して直ちに會長のお許しを得た。それから宴に移つて校歌の合唱やら紀念撮寫やらで大騒ぎをやつて十一時頃に母校の萬歳を唱へて散會した。集まつた人は左記

を生じ、約半數——僅々三十名に減ず、されど由來反撥力に富む我が早稲田健兒は、よく其不況に處して却て勇氣を増し努力を惜まず、不滅の地盤を築きつゝ、あるを賀せざるを得ず、因に當夜の出席者左の如し。

- (幹事) 關善實(領事館) 清水金八
- (日華紡織) 岸至(東亞文究會)
- (會員) 井上義雄(滿鐵) 市原俊雄
- (泰平洋行) 友野長雄(江原商會)
- 加藤周(中華毛織) 横田傳四郎(領事館)
- 田中淳一(三菱) 谷本多喜治
- (日華紡織) 中島三郎(三井)
- 中川豊(日清汽船) 藤原誠一(上海銀行)
- 熊谷英夫(日清生命出張員)

●新潟市校友會

吾人は校友の幸福を祈る意味に於て貳月三日節分の吉夜を卜して後れ走せ乍ら新年宴會を鍋茶屋に開いた會するものは左の通であつた。一年の計は元且にあるの故を以て、現下の財政界の不況に鑑み、天下に先んじて清貧に安するの慣行を作りて範を公表せんには、少なくとも年頭祝宴の時より之を實現するを最も道理あるものと考へ、茲に極めて節約せる一席の粗宴を開いたのであるが、流石に校友諸君は何等の不平なきのみならず、却つて平素よりも一層愉快に祝盃を交換して、十年度に於ける飛躍奮闘を契つたのである。假令如何なる悪魔と雖、校友諸氏の旺盛

なる元氣と條理ある氣焔とを見聞しては自然退却せざるを得なかつたであらう。同時に吾人の前途を照すべき福の神は其意氣に共鳴したに相違なからうと思ふ。即ち我校友會は追灘式以上の効果を收めて歡談の裡に散會したるは九時を過ぐる十分であつた。

出席者

- 松井 郡治 廣島 一郎 石塚 三郎
- 安倍邦太郎 安藤 文祐 高橋 銳二
- 川上 法勵 本間 勇 清水 脩策
- 石澤 正雄 鹽谷健次郎 今川 幸吉
- 小松原謙三 小出喜八郎 笹川加津惠
- 鍵富 脩三 須貝 一幹 佐藤 芳男
- 齋藤庫四郎 舟崎 仁一

●六紫會(六商)

一昨年當地在住大正六年度商科出身の有志相會して一夕の歡を恣にして生れたのが六紫會である。毎年兩三回會合して居たが、口は達者でも筆不精の連中のみとて一度も報告もせず今日に及んだ。ところで曩に北米に遊學せし松風憲二君と甲谷陀内田商事に勤務せし幡生悟一氏とが歸朝せられたるのを機として、兩氏の大气焔を拜聽すべく懇親會を二月九日大阪市南區戎橋旗亭幡半に開催した。出席者は左の十六名。

- 中川長次郎 南方常太郎 野本 篤助
- 吉田 憲一 山崎 巖 南木 萬助
- 松風 憲二 横山 包隆 安部 孝造
- 幡生 悟一 豐田 豐吉 神戶 信一
- 長谷川義助 福田 環二 加藤 克己
- 小野 順治

次回の幹事松風君等の發議で此次

は柳烟る三四月の交京都鴨川のほとりて開催することに決定した。因て生ずる費用は全部同氏の篤志により負擔せらるゝさうであるから、殆ど今席に倍するの参加者を見ることであらう。六紫會に富豪の數の特に多きこと欣幸としつゝ、談笑裡に夜十時散會した。

●明治四拾四年度商科卒業四四の會(大阪市在住)

大正拾年貳月貳拾貳日午後六時より、惠比須橋播半に於て明治四十四年度商科出身同窓會を開催す。出席者十二名、頗る盛會なりき。常任幹事二名を推選し母校並に校友會本部に連絡を取り、盛會の意義ある向上を計らんことを致し、尙數要件を決議し、校歌三唱、和氣霽々の内に散會す。時に午後十時なりき(幹事報)

常任幹事

- 松原淳太郎 荳谷瀧三郎
- 湯淺 洗身 荳谷瀧三郎
- 松原淳太郎 森 太三郎
- 安部 一雄 野吹 實
- 深井 延 新里藤一郎
- 小野原初太郎 板倉菊二郎
- 芳賀重之助 郷間 宗平

●稻門艇友會

去二月二十三日午後六時、丸之内永樂俱樂部に於て稻門艇友會を催した。折からの寒風を物ともせず、參會せられしは皆往年艇界の猛者。定刻鹽澤會長より母校運動部及短艇部の件につき御報告があり、次で食堂を開き、岩田豊之助氏に送別の辭を、喜多壯一郎氏に歡迎の辭を述べたので、兩氏より交々御叮嚀なる御挨拶があつた。終而乾盃以て兩氏の健康を祝し、更に席を改めて幹事及委員の改選を行ひ、將來益本會の進展を期すべきことを約して散會した。其間在學生諸君にして猶艇友會の主旨及立場等御存知なき人々及御不審を抱き居られる向も有之やうであるから、之が徹底を謀るべく動議の提出があつたので、御參考までに聊か本會の主旨を摘録致します。

「稻門艇友會は早大出身者にして早大短艇部員たりし者及其關係者にて組織する團體にして、母校短艇部の諮問に應じ、極力之を援助する機關なり。然而將來と雖當初の精神を以て終始せんとす」
右は本會成立の大眼目で、時に觸れ再録するものも有益かと思つたので、尙當分の内本會本部を母校附屬工手學校内に設置しましたから、將來質疑或は希望等有之節は、母校片山主事に御問合せになれば御便宜と思ふ。當日の出席者及委員幹事左記の通りであつた。

- 鹽澤 先生 氏家 先生
- 岩田豊之助 喜多壯一郎
- 山本 義之 池田唯之介
- 澁谷 三 八田 喜三
- 鈴木治三郎 山内 賢三
- 中村 喜藏 西山己之助

- 高木 武夫 深澤 政介
- 二階堂行善 松宮 三郎
- 杉本 光治 小能倉次郎
- 飯塚 鑛作 宮本 昌常
- 島崎 尚 水谷 武
- 片山 利久 上村 鐵雄
- 浦本栂二郎

新選幹事

- 片山 利久 浦本栂二郎
- 飯塚 鑛作
- 新選委員
- 今藤 勝彦 喜多壯一郎
- 澁谷 三 盛山 智利
- 小林 清三

●奉天校友會

豫て當地校友會に御盡力下さつた校友佐々木義山氏が、今回大石橋地方事務所長に御榮轉さるゝこととなつたので、その送別會を兼ね臨時校友會を二月十七日午後五時より志城飯店に於て催すこととなつた。大分新らしい顔の人も集まつた爲め、稀に見る盛會を極め、談笑湧くが如く、それからそれと興趣が盡きさうもなかつた。午後八時散會間際の母校萬歳の三唱は、在外校友に一人の心強さを感じしめた。此の日集まつた人々は左の十六氏である(木谷生)

- 石田 武亥 佐々木義山
- 富村 順一 皆川 秀彦
- 平塚 安彦 三朋 諒夫
- 小松 理平 渡邊 祐康
- 狩野 忠鷹 中村 英祐
- 野中 藤作 山岡醇一郎
- 鶴川 恆雄 上田 正捷
- 石村 幸作 木谷 辰巳

校 友 面 影

森 盛一 郎氏



新東京商業會議所議員 森盛一郎氏

眞頃行はれた東京商業會議所議員
選挙の競争の激烈さには、候補者も

得ない程に、三田や一橋に對しては
顔色がない。彼の商業會議所にすら
會て一の議席をも有し得ないで、ス
タートの遅れた口惜しさをしみる

選挙者も、管理者は勿論、第三者で
すら只々意外!! の眼を睜るばかり
であつた。この競争に吾が稲門唯一
の候補者として打立つたのが森盛一
郎氏で、美んごとく唯一の——稲
門最初の——當選者てふ名を贏ち得
たのであつた。文壇の雄・政界の剛・
綺羅星の如しと常に肩を並かしつ、
ある吾が同窓も、實業界では? と
問かれると、思はず頭を拱えざるを

味はつて来たのであつた。それ丈今
回の氏の當選は特に同窓の注目を惹
くのである。
一日氏が活動の本陣なる日本橋南
茅場町の織田信託會社を訪ねると、
あの豐滿な——全て是れ膽と力——
ともいふべき巨軀を専務の椅子に埋
めながら、キビくした情熱の籠つ
た口調で、
「面影に吾輩を? : 未だ幾多の先輩

があらうではないか……。
と躊躇せられるのを強ひて、尙印象
の新しい選挙感想談にペンを走ら
せた。

候補に立つたのは——商業會議

所議員といつたところで實業界の
一世話役に過ぎない。が、重要な
一機關ではある。但從來は大に活
動すべくして活動しなかつた。從
つて重用もされなかつた。これは
畢竟人の問題なのであるから、此
の機に於て是非適材を擧げたい。
特に在京校友四千の中、大多数は
實業界の人であり、同時に相當の
地歩を占めて居る先輩も尠くない
し、のみならず、日清生命・日章信
託・日華窯業・日章火災海上再保
險・ボルネオ護謨……等の早稻田
系統の會社や、其の他關係會社も
可なり澤山あつて、校友が皆重要
な活動のハンドルを握つて居る有
様なのに、未だ商業會議所に一人
の議員をも有しないのは實に遺憾
である。出來得べくんば校友中の
誰かを推したいものと考へて居た
が、自ら之れに當らうなど、は毫
しも期して居なかつた。といふの
は事實非常な多忙な身で、餘裕の
無いばかりでなく、實業家として
は、餘事に手出しは大禁物——を標
語としてゐるからなので……。と
ころが友人先輩間の不圖した雑談

一種異つた競争——社會生活そ

のものが一の競争であるが、選挙
競争は亦一段激烈な肉薄戦である
それに今度の競争は一種特異なも
のであつて、第一これが政戦なら
ば、主義主張を異にせる纏まつた
政敵があるのだが、この競争には
夫れが無い。相手は皆實業界の友
人や先輩で、運動するにも實にや
りにくい。特に主義政見が全く相
反する相手ならば正々堂々と大に
やつて行けるが、此競争は左様な
筋合でない。更に又競争相手なる
ものが、あつてないやうなもので
ある。自分の懇意な候補者は一人
でも多数に當選して貰ひたい。即
誰れを落して誰れに勝たねばなら
ぬと云ふことはない。此點が實に
萬事にやりにくかつたと思ふ。又
政戦ならば鳴物入の運動法で大に
人氣を湧かすの要もあるが、相手
が商人や會社ではトント利目が無
い。競争には熱が必要だが、何せ
よ如上の始末で自熱になりやうも
ない。妙な競争であつた。
唯一の地盤唯一の武器——とこ
ろが友人や先輩は、自分が初陣の
ことであるからといふので、非常
に心配して、熱心に盡力して呉れ
られた。他の候補者には質屋業組
合・材木商組合、藥種業組合……

といつた様な團體が出来て居て、

少くも或點までは確定的投票を持
つて居る。然るに自分には何物も
無い。只友人先輩の同情といふ唯
一の地盤に頼るのみである。又自
分は才能も乏しい。財産も無い。
が、身體の強健と熱心と努力——
この唯一の武器に於ては、六十六
人の候補者中何者にも譲らぬと確
信してゐた。此の唯一の地盤、唯
一の武器で、愈々名乗を揚けたの
が選挙期日前十日に迫つてからで
朝の八時から夜の十二時まで東奔
西走、歸つてからは其日の活動の
得失を省み、明日の計畫の是非を
究めて、寢に就くのが午前二時、
殆ど不眠不休の活動を續けること
十日間、幸に當選の榮を得たので
各方面への御禮廻りやら新議員の
結束やらで又十五日間、二十五日
目で始めて家庭で夕餉の卓に向つ
た。マア遺憾なく精力主義を發揮
し得たのである。
戦の跡を顧みて——種々な經驗
や永久に忘れられない教訓をも享
けた。
共鳴心の尊さ——幸に中以上の得
票を以つて當選の名を列するに到
つたのは、一に友人先輩諸君の賜
といはねばならぬ。さもなくて、
如何して一の地盤も有たぬ新顔の
平凡候補者が當選の圈内に入り得
よう。自分は只管この厚い熱い同
情に對しては心の底から眞に感泣

してゐるのである。病床の身をツツト拔出して來たり、或は大坂の旅行先きから急遽いで歸つて來たりして、清き一票を投じて呉れた人々の心根を如何して忘れられよう。自分はしみじみ感じた。人の愈々といふ利那に寄する同情——苦樂に共鳴する心情——といふものが、如何に貴く有難いものであり、人間としてかゝる温かな和かい心情を有することの如何に必要なものであるかといふことを。意外なる同情者——人の死の間際に等、思ひがけない者から思ひも寄らぬ同情に與かつたり、生前に何等期待を有つて居なかつた人から、死後の始末を萬端片付けて貰つたりする例がよくあるものだ。といふ茶話を某國手から會て聞いたことがあつたが、今度の選挙に際して成程と其語を追憶せしめられた。實に意外な人——といふては失禮だが——正直のところ實際思ひも寄らぬ人から非常な好意同情を享けたのである。この意外な同情に浴することの喜悅は譬ふるに言葉もない。

一人森君といつて、かくくゝの經歷人物の候補者もあるがといふとデは其の方にといふ挨拶に、最初の一人に對しては、意外な物數奇もあるものと思つたが、一人ならず五十人中實に四十人も同様な場合に會して見て、始めて新人の要望が一般の心裏に漲つて居るのを察したと話された。如何にもこの事實は自分一人のみに對しては無い。五十人の當選者中二十人の新顔を見るに至つたことが争はれぬ證據である。有権者の自覺——有権者の總數は一萬三百七十七、その内受信不能で返送となつたのが一千餘、病氣や旅行や通知狀紛失——といった様な不可抗力に因る投票不能者が是又一千餘、是れを除いて見ると彼の日の投票數八千は正に全有権者が自己の權利を行使したものと云ふて差支ない。このやうな例は恐らく商業會議所の選挙といふ選舉に於て未曾有のことであらう。従つて夫の混雜：馬場前門の方まで堵列して五時間も寒風に曝され、三度も選挙場を閉ちて整理を行ふべく餘儀なくせしめ、五人も卒倒者を出すといふ騒ぎを演ずるに至つた事である。かゝる意外な現象に世の耳目を驚かしたのは、いふまでも無く有権者の自覺に基くものであつて、暗黙の裏に人心の革まり行く様をばありくゝと語

るものではないか。三十八年は大學部政治經濟科第一回の卒業生を出した年である。この大學部!! 第二回!! といふ共通意識が自ら砥礪したものか、思想界の大山郁夫氏、議政壇上の永井柳太郎氏等多士濟々である。が、實業界に於て嶄然頭角を現はせるもの、一人としては、何としても森氏を推さざるを得ないであらう。學校を出てから米國に遊ぶこと三年、歸朝つて實業界に投じてから未だ十三年にしかならぬのに、其間の加速度の伸展振は只々驚くの外ない現に取締役たる會社には、曰く日清生命、曰く日章信託、日章火災海上再保險、日華産業、ボルネオ護謨、織田信託、株式會社東京會館……、監査役たる會社には日本電氣鐵工……等がある。あの力に充ちた偉軀、明晰な頭腦、燃ゆるが如き情熱、進取的攻勢的な態度、宛乎早稲田スピリットの標本であるかの如うな斯の人の未來は、何處迄伸展することやら最も利目に値する。(T)



校友動靜

- 川邊喜三郎氏と其の著作
四十年大學部法學科得業の川邊氏は、かねてシカゴ大學に於て攻學中なりしが、曩頃學長への通信に據れば、今回 The Press and Politics in Japan といふ一書を著はし、シカゴ大學に版權を譲渡せりと。因に同大學にては近々之を出版する由。
- 中田浩氏より
留學生中田氏(商)は、二月十九日天洋丸にて桑港發歸朝の途に着きたる由報道ありたり。
- 牧野養智氏逝去
明治大學教授牧野氏(6推薦)には久しく病痾の爲め相州鎌倉に靜養中なりしところ、藥石效なく遂に二月五日逝去せらる。十日午前十一時東京市築地本願寺に於て告別式を執行す。
- 末高信氏着米
一月十七日留學の途に上りたる留學生末高氏は、一月三十一日無事シャトルに着せる旨學長宛通信ありたり。
- 石黑雅夫(四一)尾三製網株式會社長となる(名古屋市中區大阪町三ノ八五)
- 仙臺岩太郎(四四)北陸毎日新聞東京支局長を辭し、株式仲買人片岡辰次郎商店調査部長となる(芝區車町一六)
- 高野清八郎(四五)神戸又新日報東京支局編輯長、民友通信社編輯長及憲政會本部發行「憲政」編輯主任を兼ね(府下大井町五三八五)
- 玉木武則(二)日本酸素製造株式會社を辭し、野村木材株式會社に入る(小樽區花園町東二ノ一四會社小樽支店)
- 古市敏雄(二)東京古河銀行大阪支店長代理に就任。
- 左近允靖雄(六)大阪市日本濾水器株式會社勤務(大阪府外十三松原通二丁目角)
- 垣内民應(八)加島銀行本店營業勤務(大阪府天下茶屋杉本町車庫裏和田方)
- 内山靖孝(九)大阪市西區川口町セールフレザー株式會社大阪支店機械部に勤務(大阪府外天下茶屋南海驛前北入布袋館)
- 的場哲(九)帝國公債株式會社に勤務(芝區佐久間町一ノ三佐々木方)
- 市吉徹夫(三七英政)中華民國北京三菱公司

業務移動

專政
英政

大政

●三明諒夫(三八)東京通信社奉天支社記者となる(奉天浪速通三七同支社)

●杉浦謹次郎(三八)日本化學紙料株式會社東京出張所に轉勤(下谷區上野櫻木町一八)

●渡邊五郎(三九)大阪野村銀行北濱支店勤務(大阪府豐能郡岡町錦通一丁目)

●福田市平(四二)朝鮮銀行を辭し東京朝日新聞社に入る(小石川區久堅町一〇八)

●村瀬眞一(五)名古屋銀行を辭し大野銀行に入る(豊橋市大野銀行支店)

●島山愛二(六)高井と改姓、高井織物株式會社に勤務

●西村道太郎(八)大阪朝日新聞記者となる(大阪市北區東梅ヶ枝町一二四)

●山田四郎(九)神田銀行調査部勤務(牛込區喜久井町五)

●阿部源榮(九)日本銀行福島支店勤務(福島市同行支店)

專法

●田中豐文(四〇)虎姫市場株式會社取締役社長となる(滋賀縣東淺井郡虎姫村)

文學部

●直江忍(四一大文)宮崎縣立宮崎中學校に轉任

●井上定次郎(四五大哲)金光教桃山教會長となる(大阪市南區天王寺堂ヶ芝町五七五六ノ二)

●伊藤喜代治(四五大和)仙臺鐵道局庶務課に轉任

●神絢一(五大英)市立深川圖書館主任となる

●上村英雄(八大英)東京毎日新聞社を辭し東京朝日新聞社に入る(小石川區小日向水道町四二都堂)

●古川實(七大英)大日本婦女教育會編輯主任となる(牛込區南榎町五)

●小松誠三(九大英)下關市下關商業學校に奉職(下關與小路九三六)

●阿部仲次(九大英)婦人公論記者となる(府下西巢鴨町池袋三)

●川手龜之助(四〇)藤木ビルブローカー銀行門司支店に轉勤(門司市清瀧、安川社宅)

●池田常道(四三)東京朝日新聞社に轉任(芝區白金三光町二五一)

●三俣惣之進(四三)東京鐵道局運輸課に轉任(四谷區信濃町驛構内官舎)

理工科

●高橋吉治郎(四五)柱二と改む、やまと新聞記者となる(赤坂區新町二ノ七)

●山本三三(四五)臺灣臺中市臺灣商會

●末永謙士(六)印度孟買三井物產會社支店に轉勤

●阿部直通(七)本所區尾上河岸一八に宇治商店を開始す

●淺羽茂興(七)植松合名會社東京出張所主任となる(京橋區木挽町三ノ二〇同所)

●大石榮一(八)山下合名會社を辭し浦賀船渠株式會社に入る

●山形章(八)茂木合名會社を辭し株式會社南昌洋行に入る(牛込喜久井町三四)

●原田四郎左衛門(九)醬油釀造業を營む(滋賀縣蒲生郡八幡町)

●岡田豐(九)高田協會に入る(麴町區永樂町二ノ二同商會内)

●岡田雄一(九)函館製網船具株式會社に入る(小樽區色内町七ノ二九)

●佐伯貞治(九)東京汽船會社に入る(芝區三田四丁目七晚成館)

轉居

●鷺見安次郎(九)朝日海上火災保險株式會社に入る(神戸市夢野町四ノ三)

●狩谷忠廣(三建築)滿鐵會社を辭し奉天滿洲土地建物會社技師となる(奉天隅田町六同社)

●本間駒吉(四電氣)郡山電氣株式會社技師となる(福島縣郡山町同社)

●百萬精三(四電氣)萬松商會を營む(金澤市荒町二ノ七四)

●城口龜吉(九應化)城口研究所大阪出張所に轉勤(大阪市北區會根崎中一丁目一四五ノ二同所内)

●高等師範部

●向後順一郎(三六國漢)上海東亞同文書院中華學生部勤務

●松田勇太郎(三九英語)和歌山商業學校に轉任(和歌山市有田屋町)

●平田與七(二國漢)長崎商業學校に轉任

●大野日三(八國漢)群馬縣高崎中學校に轉任(高崎市並榎町三四九)

●寺崎俊雄(八英語)一般輸出入業三宅商店を開始(京都市富小路三條上同商店)

教職員

●安田善三郎(基金管理委員)麴町區飯田町三ノ一に移轉、當分相州鎌倉原之臺別莊(電鎌倉一三五)に假寓

●大澤一郎(助教授)P. O. B. 1st, University of Illinois, Urbana, Ill., U. S. A.

●阿部良夫(講師)巢鴨町一八六六(大塚辻町停留所東北一丁半)

●内山守太郎(二八)朝鮮京城府本町一ノ一六

●石井頑司(三八)東京市外西巢鴨町巢鴨七七五

●石田福治郎(三九) Apartado No

●大島正一(三九)小石川區東青柳町二三

●岩崎慶次郎(四)神奈川縣浦賀町大津八三二

●西井萬馬(四)三重縣一志郡大三村井出久水(八)大阪府南區南坂町一五四株式會社キヤパレー、ヅ、パノン内

●竹内種雄(八)福岡縣遠賀郡戸畑町驛前竹内組事務所

●武村重之(八)牛込區喜久井町二〇

大政

●丸茂武雄(八)芝區南佐久間町一ノ一耕農園

●荒木龜之助(八)横濱市淺間町五五三

●吉本清治(九)松江市殿町二〇九

●古内良策(九)神奈川縣川崎町堀之内二六〇

●小濱清衛(九)四谷區新宿二丁目七二

●栗屋誓(九)東京市外下戸塚五四八縱橫俱樂部

●崎山刀太郎(三八大政)下谷區仲御徒町二ノ六一(電下二四二七)

●杵淵義房(三九)牛込區岩戸町四

●村上猶太郎(四一)牛込區榎町五七

●最上谷富治(四四)東京市外大井町篠谷六一七〇

●松永安衛(四五)靜岡縣富士郡加島村

Specie Bank, Ltd., Albert Building
Homly Raw, fast, Bombay British
India.

●春日一郎(8) 東京市外下戸塚五四
九

●中田謙吾(9) 東京市外下漣谷六一
四

●淺見登郎(6) Columbia University
New York City, U. S. A.

●兒玉秀雄(9) 日本橋區北島町中外
商業新報社

●邦法
●生田七郎(三七) 牛込區市ヶ谷河田
町一九

●岡田鐵藏(二五) 愛知縣海部郡津島
町名古屋區裁判所津島出張所

●坂本隆昌(三五邦行) 東京市外下戸
塚三〇四

●專法
●藤谷元泉(5) 本郷區西須賀町九時
習館

●水上藤右衛門(7) 東京府下代々幡
町本村北五三〇菅沼方

●牟田貝三(8) 本郷區東片町一五二

●長尾秀太郎(9) 東京市外大森町不
入斗七八二

●椎名隆(9) 千葉縣西鏡子町本城區
一五一

●大法
●深川七藏(7英法) 東京市外西大久
保一八六伊勢谷方

●畔野求己(8英法) 仙臺市靈屋下一

●久保田信之(9英法) 本郷區臺町三
八矢代方

●北林實(9英法) 東京市外高田町雜
司ヶ谷四七九

●文科
●御手洗道幹(三九大文) 臺灣臺北龍
口街六丁目中學校官舎

●河合文太郎(四一大英) 札幌區南一
條通西一七丁目官舎

●大野木繁太郎(6大英) 尼ヶ崎市竹
谷新田二三九

●江間道助(9大英) 東京市外西大久
保六一

●商科
●服部禎輝(四〇) 京橋區新菜町一ノ
一六(電京四三六九)

●山崎恒四郎(四一) Consulate of
Japan Vancouver, B. C.

●早川欽介(四二) 吳市敵原町三三

●津田和助(四二) 東京市外高田町一
五〇八

●小西佐五郎(四三) 牛込區鶴卷町二
二三

●藤永品太郎(四五) 名古屋市中區堅
三ツ藏町二ノ四

●近藤貴徳(四五) 京都市七條大宮西
入商工業信託株式會社

●武井正房(2) 神戸市西須磨字下樋
詰六ノ一

●村澤二郎(2) 東京市外下漣谷二六
五

●水野春吉(2商) 高知市外潮江村

●朝柄恒七(3) 大阪市西區八條通三
町目二四

●今村停三(4) 本郷區東片町一二四

●吉田秀人(4) 本郷區向ヶ岡彌生町
三ホノ一八(電小四六二三)

●西岡菊馬(5) 京都市大學病院第七
病舎

●山縣長六(5) 兵庫縣御影町石屋字
御量一〇一

●丸尾松彦(5) 牛込區市ヶ谷藥王寺
八三

●松浦進一(5) 東京市外戸塚町源兵
衛二四六(面影橋近ク)

●木谷正朔(6) 神戸市西須磨八本松
西八ノ一

●廣瀬作三郎(6) 神奈川縣鶴見豐岡
七〇四大阪商船社宅(電鶴見一五
九)

●村木清一(7) 德島縣板野郡大津村
大代岡順次方

●崎田庄三郎(7) 福岡市博多古溪町
一二宮本方

●丸尾玄吉(8) 牛込區市ヶ谷藥王寺
町八三

●一瀬了輔(9) 小樽區稻穂町西六ノ
一上出方

●大石肇(9) 横濱市中村町打越一四
五一水口方

●與田孝一(9) 大連市千代田町九號

●山田武太郎(9) 大阪府天下茶屋
驛前五六八高瀬浩周方

●二口外二(9) 大阪府東成郡天王寺
村天王寺加島銀行寄宿舎

●宮本一雄(9) 兵庫縣武庫郡打出村
小槌沼野方

●理工科
●中川堯春(2機械) 秋田縣由利郡下
瀧村寶田石油會社羽川鐵場

●隅野喜四郎(3電氣) 姫路市下寺町
四〇

●千木隆一(4建築) 大阪府東成郡天
王寺村天王寺六〇八八

●角逸三(4探治) 小石川區茗荷谷町
一五

●久芳龍真(6機械) 本郷區春木町二
ノ三二吉岡方

●代永泰(7電氣) 千葉縣檢見川町稻
毛海岸川島別邸

●梅崎覺二(7探治) 二月二十八日大
阪商船はわい丸ニテ渡歐

●新井保(8機) 横濱市西戸部町西ノ
原一五七七

●西卷準一(8電氣) 神奈川縣鶴見町
豐岡六一八

●代家隆武(8電氣) 八幡市西本町五
丁目國松方

●十代田三郎(8建築) 京都市聖護西
町四保養館

●牛山琢郎(9機械) 朝鮮龍山步兵第
七十八聯隊戰車中隊第四內務班

●湯屋基三(5國漢) 滿洲安東縣六道
溝日華絹綿紡織株式會社々宅

●田中幸右衛門(5英語) 久留米市寺
町二九

●土生武猷(8國漢) 東京市外代々幡

町幡ヶ谷南笹塚
改氏名
●倉持光壽(3大哲) 秀峰と改名
●新田弘文(3商科) 舊姓松岡に復す
●田中熊雄(4專政) 喜三と改名。福
岡縣に轉籍、現住 山口縣原狹郡
出田村福田兼石吉太郎方

明治四十四年專門部政治經
濟科得業
(大正十年二月五日死亡)
平賀 博氏
大正六年推薦校友
(大正十年二月五日死亡)
收野 義智氏
大正九年專門部政治經濟科
得業
(大正十年二月四日死亡)
森 正憲氏
右諸氏の訃報に接し哀悼の至り
に堪へず茲に謹て弔意を表す
大正十年三月十日
早稻田大學校友會

名簿訂正
四三頁 高橋修一三十九年度大法の部
にあるは七年商科の誤
六〇頁 古川實一古川の誤
八四頁 北一東京市電氣局とある
は東京瓦斯電氣工業株式會社の誤
一二五頁 武廣武雄一臺灣銀行員御影
町云々とあるは全部誤にて、研究科
在學(府下高田町雜司ヶ谷七〇九
居住)
一四九頁 小林本功一長岡市郡立工業
學校とあるは縣立工業學校の誤
一六九頁 山下潤一郎一熱田機器製作
所とあるは名古屋機器製作所の誤

學生會合

支那協會例會

今後に於ける諸問題は必ずや東洋殊に支那を中心として起るべきは識者の齊しく認むる所、我協會は更に日支親善の爲め大いに爲すあらんとし、去る二月五日丸之内永樂俱樂部に於て今年始めての例會を開催す。

來賓小山精一郎氏、呼野義幸氏を始め、會長青柳先生、顧問清水泰治先生、善生永助先生以下會員二十有餘名の出席あり、七時川村君の開會の辭について青柳會長は「新々支那之建設」と題し、現民國の君主國設立の臭味をおぶる 共和國建設の革命失態を種々の方面より觀察し、眞實なる共和國たらんとせば先づ現代青年の奮起して純なる新支那を建設するの肝要なるに言及せられ、小山氏は日支關係の前途に就いて主として米國を中心とせる支那觀、彼の金力政策、我の武斷的政策の比較、或は新聞政策に教育政策に關し、約一時間にわたる國際法學よりの見地及び實際の方面よりの有益なる談話あり、次いで清水先生は歴史上より見たる支那社會の真相に關し、社會制度の吾に比し大いに自由にして是れ彼が長所にして又短所とする所なるを述べられ、善生氏は支那に於ける日本商業會議所の聯合會議に就いて、先日

開かれたる同會議の詳細にわたり、且つとかく我の祕密的にして各方面の疑念をいだかしむるは遺憾にたへずとの高見を發表せらる。呼野氏は山東省に於ける鹽田事業の有望なる事を自身目下の實驗上より説き起し、鹽の國民生活に重要なものと、政府は斯の如き重要な産業に對しては食料問題解決上之が施設を爲すの義務あること等を力説せられ、最後に會員杉山君は、現代の教育はや、もすれば學理にのみ重きをおき實際より遠ざかるの弊あり、宜しく今後の教育は併行的ならざるべからざること高調せられたり。かくて十一時散會せり(西川報)

音樂會

京都府下に於る文化聯盟團體たる醒人會の招聘に應じ、當音樂會は一部派遣演奏
午後七時東京驛發。

翌八日午前十一時四十分醒人會の本部所在地なる京都府園部町に著し會員諸氏の盛なる歡迎を受け、旅館綿儀樓に投ず。此の日當地方近來稀なる降雪ありて夜に入るも止まず、一行は翌日の爲の練習をなして寢につく。翌れば九日、正午より會場たる公會堂に到る。一時開會、醒人會

員、犬石藤太郎氏の挨拶に次ぎて演奏を開始す。主なるもの左の如し。

- 合唱 一回
- 絃樂四部合奏 一回
- ギター獨奏 一回
- ピアノ獨奏 一回
- マンドリン獨奏 一回
- ヴァイオリン獨奏 一回
- マンドリン四部合奏 一回
- マンドリン四部合奏 一回
- 三部合奏 一回
- 深音獨唱 一回

雜

庭球コートの新設

既報の如く我が庭球部に於ては愈硬球を採用することとなるを以つて、今回該コートを新設することに決せり。

高等學院のランニングトラック建築

高等學院の運動場に、新にランニングのトラックを建築すること、なれり。

文明協會主催時局研究會

二月廿七日大隈侯邸に於て文明協會主催の時局研究會を開く。席上平沼學長は「朝鮮教育談」と題して講演せらる。

人會員諸氏には盛大なる宴會を催して一行を饗はれたり。茲に演奏會開催の會員諸氏の芳名を録して厚く感謝の意を表す。

- 中山傳之丞氏 永井繁三郎氏
 - 犬石藤太郎氏 廣野 達秀氏
 - 平野 弘二氏 藤井 兵次氏
 - 外會員五十二名諸彦
- 翌十日、一行は自動車四臺にて園部停車場に向ひ、午前十時卅五分發の列車に乘じ、途中京都市に下りて各名所を見物、七條驛發九時廿七分の夜行列車にて十一日午前十時無事歸京せり。(山の内)

錄

擬國會

二月十一日午前八時より講堂に於て擬國會を開く。當日午後前衆議院書記長 現衆議院議員林田龜太郎氏特に臨席せられて、議場の構成議事の整理等につきて種々指教せられたり。議事の詳細は後報に譲る。

雄辯會主催尾崎氏講演會

二月廿二日午後二時より、高等學院講堂に於て、雄辯會主催にて衆議院議員尾崎行雄氏を聘して講演會を開く。氏は其持論たる「軍備制限」に就きて滔々二時間に至る雄辯を振はれり。講演後幾多の質義に對して叮嚀に應答せらる。

德永、山本及小林の三博士と大學紀要

德永・山本及小林の三博士には、多年其研究せられたる結果をば大學紀要と名けて近く之を公にせらる豫定なりと。

德永博士の出發

既報の如く德永博士は、歐米學術の視察のため二月十八日午前九時二十五分東京驛發、十二時春洋丸にて横濱港を出帆せり。當日東京驛には本大學教職員は勿論多數知名の士の見送あり、又平沼學長・田中理事・前田幹事及各課主任等は横濱埠頭まで見送りたり。

平沼學長出張講演

平沼學長は、二月六日埼玉縣北埼玉郡加須町に於ける同町青年會、軍人分會及皇道會聯合主催の講演會に招かれ、同日午前九時十五分淺草驛を出發し、同町小學校講堂に於て「變時の思想」の題下に約二時間の講演をなし、了つて停車場前野本樓に於て同地校友野中新平、五月女傳一、井上宗四郎の三氏及有志者より晚餐の饗應を受け、尙有志の請に因り揮毫、同夜七時五十分發歸京せらる。

五來教授の地方講演

五來教授は、校友田村章四郎氏の照會に因り、埼玉縣柏壁町自治俱樂部主催の講演會に臨み「社會問題より普選問題へ」と題して講演せり。

浮田博士及難波贊助會幹事の歸朝

浮田博士及難波贊助會幹事の歸朝

昨年歐米視察の途に登りたる教授
浮田博士及贊助會幹事難波理一郎氏
は三月五日神戸着無事歸朝せり。

●小室教授の通信

先般留學生として渡米、目下Berkeleyに在る小室教授より學長宛書信の一節に曰く
二十日(一月)桑港に上陸……三週間 Berkeleyに留まり、其の間加州大學に通學致居候。當地の工場を參觀するには總て紐育本店の特許を要し候様子に御座候。三井物産會社に依頼致し、當地及途中工場視察の許可狀を紐育より取寄せ中に御座候。當地探鑛冶金科の設備は非常に立派にて、早大のとは比較にならず羨ましく存候。云々

●前橋教授の罹災

教授前橋孝義氏は、二月十八日午後十一時半出火の爲め全焼の厄に遭はれたり。

●渡講師嚴父の逝去

講師渡俊治氏嚴父には去る二月九日逝去せらる。十二日谷中天王寺に於て葬儀を執行す。

●故川口庶務主任追悼會

二月十五日故川口氏の第三回忌に相當せるを以つて、平沼學長、田中名譽理事、種村、高田の兩出版部主事前田幹事、各課主任並に故人に親交ある職員三十餘名は故人の墓所たる三崎南川願神院に會集、未亡人、遺子及親族を請じて追悼會を營む。

懇ろなる讀經の後各墓前に香花を手向け、再書院に歸りて茶菓の席を開く。席上前田幹事の挨拶、田中名譽理事及平沼學長の懷舊追悼の辭あり、五時散會を告ぐ。

●温交會規約改正委員會

一月二十九日午後一時、温交會規約改正委員會を開き、規約の改正につきて凝議し、左記の如く確定せり。

早稲田温交會規約

- 第一條 本會ハ早稲田温交會ト稱ス
- 第二條 本會ノ目的ハ早稲田大學教職員間ノ交誼ヲ厚クスルニアリ
- 第三條 本會々員ハ早稲田大學教職員タルモノニ限ル
- 但シ早稲田學園ノ關係者ハ會員ノ紹介ニヨリ本會ノ諸會合ニ出席スルコトヲ得
- 第四條 本會ハ毎年隨時會員ノ會合ヲ催シ晚餐會園遊會等ヲ開ク
- 第五條 本會ノ晚餐會園遊會ニハ朝野知名ノ士ヲ招待シテ其談話ヲ聴キ又會員ノ送迎ヲナスコトアルベシ
- 第六條 本會ハ左ノ各號ニ準ジ香典又ハ見舞金ヲ贈ル
 - 一、會員死亡ノ場合 金壹百圓
 - 二、會員ノ父母又ハ妻ノ死亡ノ場合 金五拾圓
 - 三、會員ニシテ重患ニ罹リタル場合 金五拾圓以内
- 第七條 本會ノ會場ハ隨時之ヲ定ム
- 第八條 本會ノ事務所ハ早稲田大學

本部内ニ之ヲ置ク
第九條 本會ハ會長トシテ早稲田大學總長ヲ推戴ス
第十條 本會ハ會員ノ互選ニヨリ幹事十名ヲ置キ一切ノ會務ヲ處理セシム
但シ其任期ヲ一ケ年トス
第十一條 本會々員ハ壹ケ月金壹圓ヲ醸出スルモノトス

早稲田大學機械工學科後援會

早稲田に理工科が出来て十ヶ年を経過した。十年一昔で年々校友の數も殖え、今日では至る所の重要位置に椅子を占めて居る。其の間の苦辛は一通でない。然も新生命の開拓は日々實現して早稲田の工業的權威が海外に迄發揚せられて其の地盤は益々強固にならむとして居る。科學の進歩は一日たりとも吾人の停滯を許さぬ。一國の興敗も文化の權威も是に起因して居る、大學は今後研究的形式を取る必要あると云ふ事は今更新らしい事でもないが、容易に實現の域に到達する事能はざる事を考へると寒心の至りである。理工科で機械科は最も古き歴史を有して居る、然も其の歴史をたどり見るに目醒めた進化のあとを發見する事が出来ぬ、新設の當時は新らしいかつた設備も今は既に退歩してゐる然も何等新設備の補充なく、研究發表等の出現せざるは大學當局も重大なる責任あれど校友諸兄の鞭撻力僅少

も亦大原因たる事を覺悟せねばならぬ。此の自覺は校友一般に溢れ兩者相まつて母校發展の道を開く可く後援會は組織せられ、昨秋十月より會合を重ねる事十數回漸く成案を得、平沼學長、淺野部長を顧問に仰ぎ著々其の實績をあげやうとして居る。未だ勸誘せざるに既に百餘名の會員を得た。母校發展のため關係者各位多數會員たらむ事を切に希望する次第である。(申込用紙は機械工學科後援會に御申込の事)

早稲田大學機械工學科後援會設立趣旨

我が機械工學科が早稲田の學園に生れてから既に十餘年を経卒業生を出すこと將に四百に垂んとして居る過去を顧みるに吾人の行路は決して平坦なるものではなかつた。有らぬる艱苦を忍び今日兎に角斯界に相當の地位を占むるに至つたのは之母校の賜と出身諸君の努力の結晶によると云はなければならぬ。然し我學園出身者の抱負は決して今日を以て満足することは出来ない更に志を壯にし潑刺たる進取の氣性を以て向上せねばならない。特に社會の趨勢は一變した。嘗て吾人の熱望し高唱せる實力主義も社會一般に認められ愈々實施の機運となつた。大いに慶賀せねばならぬと共に又一方社會の需むる人材を今日以上に出さねばならぬことは勿論である。今更その責任を感じる譯ではない

が我等の將來をして更に光輝あるものとする爲めには我等の母校を完備せしめ當事者を刺激し其の教育の効果を更に偉大ならしむることが絕對的に必要と思ふ。抑も大學の使命は學術の研究にあること云ふまでもない。研究の手段は完備せる機關と設備とを得るにあらざれば到底其效を擧げる事は出来ない。由來我が學園は常に物資に缺乏し兎角熱烈なる研究心も阻害せられ居ることを思へば實に痛恨の至りである。茲に於て吾人が探るべき道としては、一方學校當局者に吾人の希望を吐露すると共に隆んなる諸君の愛校心に訴へたい。茲に吾人有志相謀り機械工學科後援會を設立して普く諸君の御賛同援助を希ふて義損を得此舉を遂行せんとする所以である。

早稲田大學機械工學科後援會規則

- 第一章 會名
- 第一條 本會ハ早稲田大學機械工學科後援會ト稱ス。
- 第二章 目的
- 第二條 本會ハ早稲田大學機械工學科ノ向上發展ヲ計ルト共ニ研究及設備費ヲ補助スルヲ以テ目的トス。
- 第三章 會員
- 第三條 本會ハ早稲田大學機械工學科出身者及同關係者及其他ニシテ本會ノ趣旨ヲ賛成實行セラルルモ

ノヲ以テ會員トス
第四條 本會ノ儲金ハ毎年拾貳圓宛
五ヶ年間或ハ一時金五拾圓拂込ヲ
以テ一口トス

第五條 會員一人ノ儲金口數ハ一口
以上トス。

第四章 委員

第六條 本會ノ事業ヲ統理遂行スル
ガ爲メ委員長及委員若干名ヲ置ク
第七條 本會ノ委員ハ左ノ方法ニ依
リ選出ス。

一、委員ハ出身者會員中ヨリ各卒
業年度毎ニ二名(内一名ハ在京)
ヲ互選ス。

二、出身者以外ノ會員中ヨリ委員
會ノ推薦ニヨリ委員若干名ヲ置
ク。

三、委員長ハ委員會ニ於テ互選ス
ルモノトス。

四、早稻田大學機械工學科ノ教職
ニアルモノヲ相談役トス。

第八條 委員ノ任期ハ三ヶ年トシ重
任ヲ妨グズ。

第九條 本會ニ委員補佐トシテ事務
員ヲ置ク事ヲ得。

第五章 會計

第十條 本會ノ會計ハ早稻田大學會
計監督之ヲ檢査ス。

第十一條 本會ノ會計ハ早稻田大學
學報ニヨリ之ヲ報告ス。

第六章 規則改正其他

第十二條 規則ノ改正ハ會員過半數
ノ贊同ヲ得ルモノトス。

第十三條 規則中明記ナキ事項ハ委
員會ノ決議ニヨル。

會員ノ決議ニヨル。
釀金ノ拂込ニ就テ
拂込ノ時期並ニ方法ハ御指定ニ依
ル

一、拂込時期——毎年一回(御
指定ノ月)又ハ數回(御指定
ノ月)又ハ毎月
ノ月)又ハ毎月
一、拂込ノ方法——集金郵便又
ハ振替貯金何レカ御指定ニ
ヨル

機械工學科後援會加入申込者口數及氏名表

●一回卒業
2 長田 善平 1 桑田福太郎
1 後藤 有三 1 谷口 巖
1 志賀 常三

●二回卒業
2 小竹 浩 2 中川 堯春
1 木島 英二

●三回卒業
1 井上 邦治 1 山内 弘
1 久山 智彦 1 多田隈弘道
1 小澤 二郎 1 高橋 廉甫
1 小林 豊一 1 橋田 肇
1 松下保次郎 1 新井 忠吉

●四回卒業
2 佐藤新三郎 2 弓別 森光
2 清水 通三 2 平野 二郎
2 金竹 馨 2 神谷 嗚
1 河野 榮吉

●五回卒業
1 根本 嘉 1 石井 定
1 中島英一郎 1 新田 憲弘
1 中村 功 1 降旗 晋吉
1 大野慶次郎 1 石澤 諭吉
1 志村朝次郎 1 大網善太郎
1 成瀬 一郎

●六回卒業
1 師岡 秀磨 1 木村芳太郎
2 三宅 隆一 1 前田 三郎
1 鈴木 徳藏 1 石津 文堂
1 多賀 叔男 1 黒山 正孝
1 山田 節 1 安永 次郎

●七回卒業
1 竹田 虎雄 1 村田榮太郎
1 齋藤 哲郎 1 比嘉 賀成
1 鈴木 實次 1 小笠原武志
1 坂入忠一郎 1 増野 薫
1 沼田 新助 1 赤沼 淳一
1 鈴木辰次郎 1 和久田政孝
1 小宮 茂壽 1 關根弘之助
1 古屋 了 5 鹽崎 集成
1 矢幡小太郎 1 來田太三郎

●八回卒業
2 塚本 忠道 1 篠原 喬亮
1 伊原 貞敏 1 加藤 榮三
1 平田 一郎 1 武部 數馬
1 矢崎壽二雄 1 大前 山人
1 小野 壽 1 土岐 竹雄
1 川村 兌三 1 花野敬之丞

●九回卒業
2 石川 四郎 1 池谷 武雄
1 吉田 直則 1 奈良乙治郎

大正九年度本會維持費釀出者氏名報告

一金貳圓宛

野中 曉平 食數 定 群司 健男
山田 敏行 山内 賢三 松井 甫芳
山下 操 松本 茂雄 牧野 繁
松田 德三郎 古林龜治郎 古殿 基
增田德三郎 小島 義正 五明 砂
小山精一郎 昆田文次郎 江口 信市
後藤 信治 秋山 廣省 安東 友哉
會田 彰誠 廣野 昇六 佐野 輝夫
佐藤 忠吾 木村半之助 北原 種忠
先光 孝 三浦 經太 三浦 辰三
岸本 雷助 三浦 勝 水島 久而
三木 喜延 宮島 文藏 椎名 幸助
宮崎 真治 森 吉三郎 瀬端喜一郎
樋口慶次郎 菅原 又次 杉田 駿
關口 七郎 鈴木 碓治 淵川忠太郎
杉浦 照次 高橋 信茂 美濃輪 亮
増山外次郎 村田 秀野 田 保男
關 淺吉 村田 三郎 小南 惟精
木村 堯 田中 三郎 秋吉 準吉
大石 敬三 藤村 平信 秋吉 準吉
石渡 熊藏 堀 安次郎 大東 藤吉
坂本源三郎 唐津 慶二 田中 達雅
倉田 太一 榎尾 學治 麻生 純
新田目春松 木下 永二 嶋木 準吉
田島 弘男 木原多賀二郎 菊池 喜一

一圓

1 山下潤一郎 1 神田 正靖
1 新堀 米藏 1 飯山 雅彦
1 飯塚 忠雄 1 岡崎 省三
1 星野 信嗣 1 庄司 甲一
1 岩井 久夫 1 古田誠一郎
1 村田 二郎 1 重盛 泰三
1 山添 章三 1 鈴木 久進

關係者

1 山井 兼武 1 大山 修一
1 關根隆一郎 1 西谷 光彦
1 沖 巖 1 野口 幹
2 土肥禮太郎
(備考)
氏名上ノ數字ハ申込口數ヲ示ス。

守政

武 吉田 國二 津田 和助
浦川數之助 眞子 博 前田 儀作
澤田 義照 橋本 平作 西本 一郎
堤 秀夫 坪井 秀恒 小池 榮
寺内 清次 市川 末松 橋本 千畝
友末 益良 小澤龜七郎 岡崎 三郎
久貝 爲良 宮下 英三 石坂 宗道
戸田 憲 大石 榮一 大津 隆雄
北澤 義男 伊東孝一郎 矢野 剛
下津 一雄 生和 光藏 星川 禮治
智場伊太郎 小野勇次郎 大谷 仁助
中村 孝一 小佐野 胤 竹内 種雄
平沼 淑郎 市島 謙吉 坪内 雄藏
今井 策次 池田 清 石井 定
岡田信一郎 岡村 千曳 岡崎 正見
大隈 信常 勝俣益吉郎 神尾 健吉
武信由太郎 田中 稗植 難波理一郎
梅若誠太郎 昇 直隆 山田 三頁
前橋 孝義 前田 實 松井 等
牧野謙次郎 藤田壯太郎 五來 欣造
藤野 了裕 町田 忠治 中野禮四郎
布村 常勝 井上 龜六 井上 忻治
井口龜三郎 井崎 慎一 伊東 知也
飯塚 幸太郎 伊夫伎準一 伊澤 啓
飯塚 新藏 飯塚庄三郎 市川 繁綱

市川 忠八 市村 英輔 岩崎 泰治
 岩崎慶次郎 岩本 次吉 飯橋 啓三
 飯倉 勝忠 稻垣 壽 生田 七郎
 今井 敏行 今村 實 今城 英一
 石川幸三郎 石附慶太郎 長谷川正光
 芳賀 恒介 島山 秀松 服部 暢
 花輪 德重 花村 鋼造 早川 有三
 早速 整爾 二宮 清德 新谷真次郎
 西岡竹次郎 西村 眞次 土居 寛通
 堀 義一 堀江 朔 堀木 克三
 細谷一太郎 戸田傳四郎 登阪宇三郎
 豐田 實 豐田 豐吉 徳永 貞通
 徳永 國雄 富永 一郎 友岡 正俊
 小笠原幾次 尾澤平一郎 緒方 一三
 及川銀太郎 大原 周作 大岡義治郎
 大瀧 讓次 大内 進 大野 禎
 大串 三夫 大澤 定男 大柴龜太郎
 大島 國造 岡 秀保 岡部重一郎
 岡田復三郎 岡安 理平 岡崎 直樹
 奥田 茂造 和田 清 和久田政孝
 渡邊 保穂 渡邊 仁彦 渡邊 清
 渡邊秀太郎 渡邊 猶作 加藤 俊一
 加々美治兵衛 加納作次郎 門脇 三郎
 川島榮三郎 川島清治郎 川本 三郎
 河合 乙彦 河原田稼吉 片岡 久宏
 片岡 清 柿西藤一郎 金井 悌藏
 金谷直次郎 風間 力衛 風間 新助
 米田 穰 米村 六松 米山 清三
 横井 春郎 横山榮一郎 吉家 敬造
 吉富 嘉春 吉川 收 吉田 秀彌
 田邊幸太郎 田中唯一郎 多田平治郎
 多良 寛 伊達 允郎 立川 長宏
 立川銀三郎 橋 山人 高橋都素武
 高田 俊雄 高山 郁平 高宮 安夫
 高須芳次郎 辰巳 源東 龍原 辰衛
 竹野 長次 武林 專一 武林 亮

武田 精三 反町 茂作 坪内 大造
 坪谷善四郎 坪谷 忠三 壺河 卓爾
 都倉 義一 土屋 卓三 中田 初
 中村 厚 中村 祐家 中野 實範
 中野 松彦 中村輔次郎 中島 榮
 永井 一孝 永井 清志 永井 彌彦
 永田 成一 長山 乙介 長松 雪夫
 矢橋 潤二 矢口 達 屋代 太美
 山田 清作 山田 佑吉 山口 成孝
 山元 兵七 山本 盛吉 山本 壽彦
 山瀬 壽一 安清 正之 矢崎豊太郎
 矢崎 豹三 馬淵 友直 前田 多藏
 前田 政勝 松井 季勝 松井覺三郎
 前島 彌 松岡 孝一 松垣 新一

河野 美雄 籠田 辰昌 近藤富次郎
 近藤泰三郎 江草 頼多 揖斐 四郎
 手島榮治郎 寺島 權藏 傳田 次朗
 阿由葉正一郎 足立 亮一 有本勤之助
 有住 宗徳 青井 嘉市 赤壁徳三郎
 荒井 鶴松 明渡智瑜太郎 淺川 保平
 淺野 源吾 朝賀 忠勝 秋谷節太郎
 佐藤 元郎 佐藤 憲弘 佐々木三郎
 齋藤 功 齋藤和太郎 坂倉準四郎
 坂本 大造 柳原 博 櫻井 銈彦
 櫻井 芳賢 櫻庭 達堂 木村 毅
 木下 茂 木山 十彰 桐山菊太郎
 菊池 寅七 岸田 常吉 城所竹次郎
 湯淺 泉 遊部松太郎 命尾 壽次
 三井 道男 三澤 豊 三木 武吉
 溝淵 兼次 峯尾 忠作 御園恒太郎
 南 壽 宮本 重國 柴田 忠徳
 鹽澤 昌貞 島田 賢平 島田 圓成
 島村 民藏 島崎 尙 樋口 定七
 廣井 一 廣瀬龜次郎 盛山 知利
 森 靜親 森 源吉 森脇 善樹
 森田勇次郎 瀬沼 寛二 芹川 幸夫
 關 達二 菅谷 通二 炭谷豊太郎
 鈴木 浩之 鈴木 兼司 鈴木 中二
 鈴木 廣助 飯星 忠雄 伊藤 開一
 上村 藤若 神田 五雄 竹内 嘉助
 中島 衛 樽岡 太郎 葛雄 一郎
 近藤 肇 安藤 誠一 森 健武雄
 渡邊富美雄 小野 忠夫 辻 祐三
 吉野野仁一郎 森 正道 杉山 茂
 池田唯之助 和久田正虎 横田 清松
 吉川 種正 田中 廣 高島 周平
 中島 常治 熊谷 明次 梁木 一郎
 眞船英之助 小林 南治 小越藤治郎
 越中 龍玄 淺野 信政 清水 道雄
 平野 履坦 廣石弘三郎 川本規世志

内藤新太郎 長尾 芳雄 小菅 笑
 佐治 正嗣 賀田 以武 金森 近壽
 桑原 誠 久保島留吉 丸岡 重堯
 藤井和賀之助 藤田 信行 安部政次郎
 佐久間 明 柴田 一 末長 勇
 荒木 雄三 岸田 榮 田中 智治
 牛久保助正 牛島 參郎 黒住 恒太
 山下 清一 樺 鎮男 有吉明治郎
 廣根 守衛 林 榮 小林誠一郎
 佐藤 久雄 煙山專太郎 飯島太惠作
 小田切 孝 竹中 虎司 梅崎 覺一
 熊本 道夫 稻垣 忠男 上村 英雄
 三須 昭氏 杉澤元三郎 高森幸太郎
 副島 平三 砂川繁太郎 杉浦梅太郎
 衣田逸太郎 遠藤喜四郎 武宮 智學
 中川竹太郎 五十嵐 力 井上 雅二
 伊藤元次郎 伊藤佐久良 伊集院 猛
 飯山 七藏 市川 正爾 岩井 清水
 磯部倫一郎 稻富信太郎 石田彌太郎
 長谷川 孝 畑彌右衛門 原 祐導
 時間從太郎 小澤 巖 大沼 齋一
 大友 行幸 大館 精一 大河内勝三
 大江 卓治 太田 元雄 岡山 眞平
 奥中 孝三 川上 親利 川副嘉一郎
 岡武 諭 一片山 雄吉 金井嘉佐太郎
 金子 從次 嶋崎 敏雄 神 英昌
 相原龜三郎 幹 清三郎 吉田甲子太郎
 吉村四方雄 永代 靜雄 田村嘉一郎
 田村 保 多田 鐵雄 谷 紀三郎
 立川 益藏 高田 軍三 高野 清
 高野 知貴 竹田 米吉 恒川 吳作
 中島 敬三 波野平四郎 武藤 安雄
 村上 綱雄 浦田 正名 薄井 福治
 功徳林俊宥 桑田 豐藏 桑原 重矩
 桑田福太郎 桑田 季次 桑江 良行
 八木 實 山根 健太 山崎於菟雄

謹告

拜啓愈御清榮奉賀上候扱大正十年度本會維持費受領の爲
 め東京市内御在住の會員各位に對しては東京集金社員差
 遣可申候間何卒御醸出被成下度地方の方々へは振替用紙
 挿入致置候間午御手数最寄郵便局につきて御送金の御手
 續被成下度願上候從來の經驗に徴するに集金郵便の方法
 は偶々御不在なるときは直に期限經過の理由の下に用捨
 もなく返送せらるゝもの實に驚くべき多數に上り且つ又
 中途紛失も尠からず又一方には督促かましの感を懐か
 るゝ向も有之様に候間一先づ振替郵便にて御願申次第に
 御座候何卒事情御諒察の上御醸出の程願上候 敬具

大正十年三月十日 早稻田校友會

校友會員各位

武藤重太郎 村上鐵太郎 村越 義衛
 内田 喜雄 氏家 正 浦野 元俊
 上田 勝 梅山 一郎 野田市三郎
 野村 龜藏 野村 四郎 野澤武之助
 野崎 辰巳 野崎 信幸 日下 仲藏
 黒田整一郎 黒澤 政章 桑原 義一
 倉住 覺藏 草村 有美 栗田俊治郎

松村 恭三 松島 肇 松本榮太郎
 増田 登 増子喜一郎 藤 嘉三郎
 藤井 武雄 藤本 慶祐 降旗 音吉
 舟木綱之助 福田 光愛 福邑 義生
 小池 素康 小池 學而 小林 四郎
 小久江成二 小山 愛司 小宅銀二郎
 小坂田隆平 小宮山 信 小平 憲吉

吉野野仁一郎 森 正道 杉山 茂
 池田唯之助 和久田正虎 横田 清松
 吉川 種正 田中 廣 高島 周平
 中島 常治 熊谷 明次 梁木 一郎
 眞船英之助 小林 南治 小越藤治郎
 越中 龍玄 淺野 信政 清水 道雄
 平野 履坦 廣石弘三郎 川本規世志

立川 益藏 高田 軍三 高野 清
 高野 知貴 竹田 米吉 恒川 吳作
 中島 敬三 波野平四郎 武藤 安雄
 村上 綱雄 浦田 正名 薄井 福治
 功徳林俊宥 桑田 豐藏 桑原 重矩
 桑田福太郎 桑田 季次 桑江 良行
 八木 實 山根 健太 山崎於菟雄

見よ！改造時代の精神を體現する最良の五大講義錄

早稻田大學講義錄

總長隈侯爵指導——經營三十餘年

商 業 科	中 學 科	文 學 科	法 律 科	政 治 經 濟 科
-------------	-------------	-------------	-------------	-----------------------

新知識の供給に
俟たれば新時代
の適者として
生存

了修月ケ八十
號一第
行發日十月四

了修年箇二
號一第
行發日三月四

了修月ケ八十
號一第
行發日八月四

了修月ケ八十
號一第
行發日七月四

了修月ケ八十
號一第
行發日六月四

す呈送書則規附本見科各にち直第次込申てに書葉

電話番
三四三
四七三
五二四

早稻田大學出版部

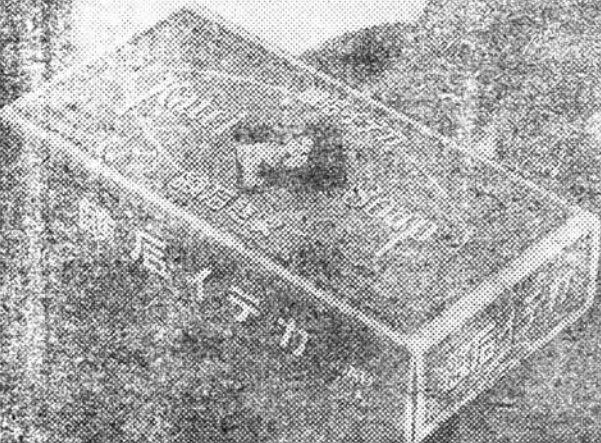
東京牛込
早稻田

顔のアレぬ

カステイ石鹼

クラブ白粉
本店特製品

顔のアレぬの
家庭石鹼



最も進歩せる電球!

其使用者は榮ゆ! 何故?

電量が非常に經濟で、而も
燭力が非常に強いから、
店の活動能率が非常
に高まる。



三越、白木、松坂屋、呉服店
帝國ホテル、精養軒
丸善書店、
外數百軒御採用



マツダ
電球 (瓦斯封入)

專賣特許廿二個領有

神奈川 四川崎町
東京 電氣株式会社
東京市東區淺草區馬場二丁目
大阪市西區阿波野橋一丁目
門司市西本町三ノ二九
東京市神田區、北本町、丸の内、大塚、上野

此物取を讀へて
御覽會の方
へは読解
を願

三井物産株式會社募集株式



募集要項

見よ!!

權勢富豪に阿らず

吾徒が毅然たる

空前の壯舉を!!

(定款申込證其他御申越次第送附ス)

本會社事業之基礎及將來

- 一、本會社ハ調帶礦油界ノ權威タル杉山兄弟商會ノ製造部ヲ繼承擴張シ設立後直ニ着手シ得ル有利確實ナル事業ヲ基礎トス
- 二、ミツビシ印調帶、機械油、ワックス類ノ品質及販路ノ優良確實ナル點ハ世既ニ定評アルヲ以テ敢テ茲ニ贅セズ
- 三、若夫レ會社將來ノ活躍發展ニ就テハ一ツニ「私心一絶萬功成」ヲ以テ終始スル吾曹ガ上下一致ノ努力經營ニ俟テ

●創立之趣旨及本會社之使命!!

- 一、「調帶ヨリ紡績へ」「綿絲ヨリ棉花栽培へ」而シテ遂ニ我國是ノ根本義タル日支經濟同盟完成ノ大使命ヲ貫徹セントスル吾人ガ努力ノ第一階梯トシテ生ル、ハ本會社也
- 二、真正確實ノ事業ハ財界ノ熱狂時ニ起ラズシテ寧ロ不況沈衰ノ時期ニ計畫セラルベキヲ實證シ更ニ定款ヲ以テ第貳回拂込ハ會社ノ基礎安固タルニ至ル迄徵集セザルコト(定款第七)ヲ誓明シテ眞面目ナル事業家ノ態度ヲ示サントス
- 三、上薄下厚、公平ナル分配法ヲ實施シテ(定款第十五條)實際的勞働問題解決ノ急先鋒タラントス
- 四、會社經營ノ内容ヲ學生ニ公開シ現代ノ一大缺陷タル跛行的實業教育ノ通弊ヲ矯正セントス
- 五、以上ノ目的ヲ達スル爲我社ハ徒ニ私心滿々タル一部資産家ノ應募ヲ拒絶シ専ラ世ノ有識者並ニ校友學生父兄諸君ノ申込ヲ歡迎シテ會社ヲ組織セントス

創立委員長

杉山兄弟商會主
早大商科學生
支那協會々長

杉山直吉
青柳篤恒

- 一 資本金總額 金壹百萬圓
- 一 壹株ノ金額 金五拾圓
- 一 募集株數 參阡株(總株數)
- 一 申込證據金 壹株ニ付金貳圓五拾錢也
- 一 第壹回拂込金額 壹株ニ付金拾貳圓五拾錢(證據金併算)

東京市本所區林町二丁目河岸通り
ミツビシ工業株式會社創立事務所
長電話本所四五六三番

發起人總代理

大日本橋風會長 山崎久吉
東洋電鍍工場主 小林重吉
社團報德社理事 杉山直吉
杉山兄弟商會主 杉山直吉
早大商科學生 杉山直吉

申込取扱所

東京市日本橋區株式東京古河銀行
瀨戶物町七番地株式東京古河銀行
大阪市東區今橋會社東京古河銀行大阪支店
三丁目十一番地

大正十年三月十日(毎月一回十日發行)